

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 20

# 瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡

発掘調査報告

1979.3

東大阪市遺跡保護調査会

## はしがき

東大阪市内には、現在周知されている遺跡が 120ヶ所程あります。これらの遺跡には、私達の先祖が歩んできた足跡が、遺構や遺物として地下に埋蔵されており、これ迄に行なわれた発掘調査からも徐々にではありますが過去の歴史が明らかになりつつあります。

今回報告する瓜生堂上層遺跡と皿池遺跡は、いずれも東大阪市内の人口増加に伴って学校をあらたに建設する必要上、事前に予定地の発掘調査を行なったものです。その結果は、本書に述べられていますように数多くの成果をあげ、両遺跡のもつ重要性をいっそう明らかにしています。しかしながら、これら両遺跡の調査では、学校建設という現実の問題をすすめるなかで、文化財をどのように保護していくかについて今後に課題を残すものもあります。

発掘調査の成果を収載した本書は、遺跡の重要性を明らかにするとともに、多くの埋蔵文化財が失なわれようとしている現在、文化財保護行政のすすむ方向に指針を与えるものの一つとして大きな役割を荷っていると思われます。

本書が、文化財保護の実をあげ、ひいては市民の皆様への文化財の御理解に役立つものとなれば幸甚に存じます。

最後に、調査の実施から報告書の作成までに御協力をいただいた関係者各位に対して心より感謝の意を表します。

昭和54年12月

東大阪市遺跡保護調査会

理事長 秀 平 勇 造

## 例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が昭和51年度に繩手北小学校の分離校建設に伴って発掘調査を実施した皿池遺跡と、52年度に八戸ノ里小学校の分離校建設に伴って発掘調査を実施した瓜生堂上層遺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、いずれも東大阪市教育委員会から東大阪市遺跡保護調査会への委託事業（皿池遺跡総額5,000,000円、瓜生堂上層遺跡総額5,000,000円）として計画し、皿池遺跡の調査は、東大阪市遺跡保護調査会芋本隆裕を担当として、昭和51年9月24日から11月25日まで、瓜生堂上層遺跡の調査は、東大阪市教育委員会文化財課芋本隆裕の担当で昭和53年1月5日から3月18日まで、発掘作業を行なった。また、これらの調査によって出土した遺物の整理は、東大阪市教育委員会において実施した。
3. 本書に掲載した遺構の実測図は、調査担当ならびに東大阪市遺跡保護調査会職員全員の協力によって作成し、遺物の実測・製図、本文執筆は芋本が担当した。また、拓本については青野正彦、一部の遺物実測には松田順一郎の協力があった。
4. 図版に収めた写真は、遺構については担当者の、遺物については東大阪市遺跡保護調査会上野利明の撮影によるものである。また、以上の調査事務は同調査会安藤紀子が行なった。
5. 調査、整理作業中には、大阪大学都出比呂志、奈良国立文化財研究所中村友博両氏より教示、助言を得た。深く感謝の意を表する。

## 本文目次

瓜生堂上層遺跡 .....	1
I 調査に至る経過 .....	1
II 位置と環境 .....	2
III 調査の概要 .....	4
1. 層序 .....	5
2. 遺構 .....	5
IV 出土遺物 .....	8
1. 古墳時代の遺物 .....	8
2. 歴史時代の遺物 .....	26
V まとめ .....	30
皿池遺跡 .....	35
I 調査に至る経過 .....	35
II 位置と環境 .....	36
III 調査の概要 .....	38
1. 東地区、西南地区 .....	38
2. 西北地区 .....	40
IV 出土遺物 .....	44
1. 弥生時代後期の土器 .....	44
2. 古墳時代の土器 .....	44
3. 歴史時代の土器 .....	46
V まとめ .....	51

## 挿図目次

瓜生堂上層遺跡 .....	1
第1図 試掘調査地点位置図 .....	1
第2図 周辺の遺跡 .....	3
第3図 調査対象地位置図 .....	3
第4図 調査地区平面図 .....	4

第5図 北壁断面図	4
第6図 井戸S E 01実測図	6
第7図 歴史時代の遺構平面実測図	折り込み
第8図 歴史時代の掘立柱建物跡実測図	折り込み
第9図 円筒埴輪実測図(1)	13
第10図 円筒埴輪実測図(2)	14
第11図 円筒埴輪実測図(3)	15
第12図 円筒埴輪実測図(4)	16
第13図 円筒埴輪実測図(5)	17
第14図 朝顔形円筒埴輪実測図(1)	18
第15図 朝顔形円筒埴輪実測図(2)	19
第16図 朝顔形円筒埴輪実測図(3)	20
第17図 形象埴輪実測図(1)	22
第18図 形象埴輪実測図(2)	23
第19図 形象埴輪(3)、須恵器、石製品実測図	24
第20図 歴史時代、古墳時代の土器実測図	27
第21図 黒色土器、土師器小皿、土馬実測図、銅鏡拓影	28
 III 池 遺 跡	35
第1図 試掘調査地点位置図	35
第2図 周辺の遺跡	37
第3図 調査対象地位置図	37
第4図 調査地区平面図	38
第5図 西北地区南壁断面図	39
第6図 西南地区土器棺墓実測図	40
第7図 西北地区遺構平面実測図	折り込み
第8図 土器棺墓主体部実測図	41
第9図 竪穴住居址実測図	42
第10図 弥生時代、古墳時代の土器、歴史時代の土器実測図	45
第11図 歴史時代の土器実測図(2)	47
第12図 歴史時代の土器実測図(3)	49

## 表 目 次

表1 タガ形態の分類 .....	8
表2 主要な円筒埴輪の特徴一覧 .....	12

## 図 版 目 次

図版1 瓜生堂上層遺跡 遺構	遺構面、遺物包含層遺存部分全景 遺構全景
図版2 瓜生堂上層遺跡 遺構	掘立柱建物S B01、S B03~05、井戸S E02 (東より)
	掘立柱建物S B01、S B03~05、井戸S E02 (東より)
図版3 瓜生堂上層遺跡 遺構	掘立柱建物S B02(東より) 井戸S E01(東より)
図版4 瓜生堂上層遺跡 遺構	井戸S E02(東より) 第6層上面溝(東より) 北壁断面
図版5 瓜生堂上層遺跡 遺構	井戸S E01 梯出土状況 井戸S E01 銅錢出土状況 第5層上面 円筒埴輪出土状況
図版6 瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪 1.A Ia類、3.5.12.A IIa類
図版7 瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪 13.A IIa類、21.25.26.A IIb類
図版8 瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪 23.A IIa類、29.30.B IIb類、31. 32.33.35.朝顔形円筒埴輪
図版9 瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪 8.A IIa類、24.A IIb類他 円筒埴輪 9.10.A IIa類
図版10 瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪 28.A IIb類 円筒埴輪 17.19.11.Bc類、34.朝顔形円 筒埴輪
図版11 瓜生堂上層遺跡 遺物	形象埴輪 家 形象埴輪 1.家 25.草摺 22.短甲他
図版12 瓜生堂上層遺跡 遺物	形象埴輪 盾 形象埴輪 24.盾 27.勧飾板 26.ひれ他
図版13 瓜生堂上層遺跡 遺物	形象埴輪 29.馬 28.30.31.32.動物 9.勧 7.石製紡錘車

		須恵器 1.2.24.杯 3.無蓋高杯 4.5.器合 6.甕 25.壺
図版14	瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪外面の調整 1.3.12.13.26.A類 29B類
図版15	瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪内面の調整 上ユビ+ヨコハケ 下タテハケ
図版16	瓜生堂上層遺跡 遺物	円筒埴輪底部の調整 右未調整 左12.正立時 の外面ユビナデ 13.倒立時の両面オサエ 25.倒立時の内面削り
図版17	瓜生堂上層遺跡 遺物	歴史時代の土器 12.黒色土器 23.27.28.30. 須恵器 他は土師器
図版18	瓜生堂上層遺跡 遺物	歴史時代の土器 土師器
図版19	瓜生堂上層遺跡 遺物	31.32.土馬 35.36土師器小皿 33.34.黒色 土器 銅鏡
図版20	皿 池 遺 跡 遺構	西北地区 弥生時代後期の堅穴住居址（西より） 西北地区 南壁断面
図版21	皿 池 遺 跡 遺構	西北地区 歴史時代の遺構（西より） 西北地区 炭化物混り暗褐色土の範囲と中世 以後の溝（西より）
図版22	皿 池 遺 跡 遺構	西南地区 土器棺墓 土器棺墓小石室 土器棺墓小石室床面検出後 土器棺墓墓壙
図版23	皿 池 遺 跡 遺構	西北地区 堅穴西南隅弥生土器出土状況 西北地区 ピット内の黒色土器36出土状況
図版24	皿 池 遺 跡 遺物	弥生時代の土器 歴史時代の土器 土師器
図版25	皿 池 遺 跡 遺物	弥生時代の土器他 古墳時代の土師器、歴史時代の土師器、土錐
図版26	皿 池 遺 跡 遺物	歴史時代の土師器、黒色土器
図版27	皿 池 遺 跡 遺物	歴史時代の土師器

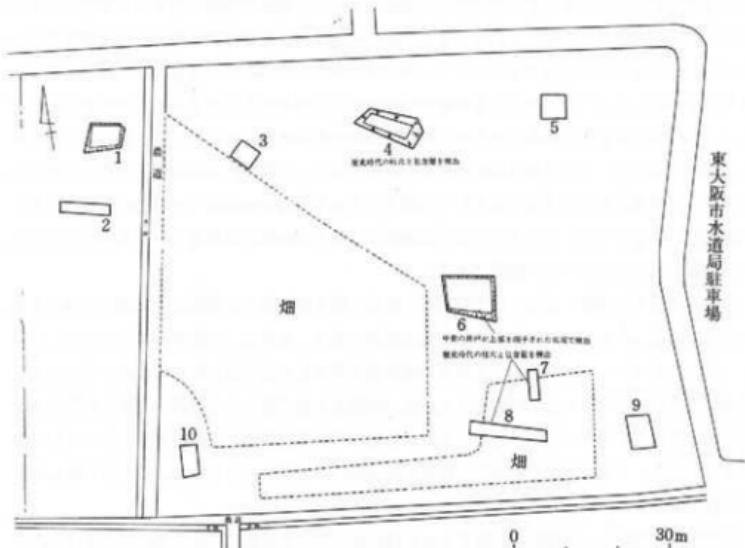
## 瓜生堂上層遺跡

## I 調査に至る経過

近年、近鉄八戸ノ里駅周辺に高層マンションの建設が増加した結果、市立八戸ノ里小学校の児童数が急激に増加し、昭和52年度に分離校建設の計画が具体化してきた。そして同年7月には、新設校の建設予定地として東大阪市中小阪263番地他の約10,000m<sup>2</sup>を内定した旨が本市教育委員会文化財課にもたらされた。

文化財課では、この計画について検討した結果、当該地は本市の周知する瓜生堂遺跡の西側に隣接する位置にあたるため、前もって遺構、遺物の有無を試掘調査によって確認する必要があると判断し、東大阪市跡保護調査会の担当で昭和52年8月に予定地内の10ヶ所において調査を実施した。その結果、弥生時代の遺物は検出されなかったものの、予定地全体にわたって古墳時代～歴史時代の遺物を検出し、特に埴輪がかなり広範に分布すること、No.6トレンチで中世の曲物柱をもつ井戸、No.4, 7, 8トレンチで奈良～平安時代の柱穴と遺物包含層の遺存を確認した。これらの調査結果によって、当該地は第1に埴輪を伴う古墳時代の遺構、特に古墳が遺存する可能性があること、第2に奈良～平安時代の集落跡に含まれるものと判断した。

その後、本市教育委員会において協議を重ねた結果、工事予定地の発掘調査を行なうこととなり、調査の期間等に難点をもちながらも東大阪市跡保護調査会の担当で校舎部分約1,000m<sup>2</sup>の調査を実施するに至ったのである。



第1図 試掘調査地点位置図

## II 位 置 と 環 境

瓜生堂遺跡は東大阪市若江西新町、瓜生堂一丁目、若江北町一丁目一帯にひろがる弥生～歴史時代の複合遺跡である、遺跡の位置は、現在の標高で5m前後の河内平野中央部にあり、さらに弥生時代前期・中期の埋没する遺構面までは、地表より4m程の厚い堆積土によって覆われている。

弥生時代前期に集落が形成された当時は、河内平野の北半部が河内湾となって残っており、瓜生堂周辺は旧大和川が河内湾に注ぐ河口付近であったと考えられている。当初の集落は、河川が沖積を進めていた自然堤防や三角州の微高地を居住地域としながら、初期の稻作に適する後背湿地を利用して農耕活動が展開されたとみられる。この段階には、瓜生堂とともに南700mの同様な立地条件の場所に山賀遺跡が存在し、弥生前期の集落としてはかなりの規模を有するものであることが明らかになりつつある。しかし弥生中期になると、瓜生堂、山賀両遺跡とも出土遺物は希薄となり、特に山賀ではこの時期以後急速に遺物の出土量が減少する傾向が認められる。一方、瓜生堂では中期の中頃になると再び規模が拡大し、北は近鉄奈良線、南は巨摩廃寺の範囲と重複する一帯をむすぶ径約500mの大集落となっており、この集落内部には方形周溝墓と土塗墓という2つの墓がみられるように、家族格差も含むものと推測される。

このような中期中頃の大集落も後期にまでは続くことなく分解し、その理由としては、気候や海水準などの変化にもとづく自然環境の変化によって、稻作や集落そのものの存立を許さなくなつた要因が生じたと解釈されている。しかし一方では、低湿地とくに河川の後背湿地そのものが洪水や滯水の常習地であることで、そのような湿地での稻作は近世になっても5年に一作などと呼ばれたように、農民自らが被害を承知の上で悪条件を克服する努力を続けたものであり、弥生時代人も当初からこのような環境で生産活動を行なっていたことと思われる。従つて、集落の分解は、ひとり自然環境の変化だけではなく、大集落内部の問題として、耕地をめぐる家族と集落の関係や自然村落としては増えすぎた集落内部を結びつける祭事機能の未熟等の諸問題の上に立つて、その上でなお自然環境の変化がどれ程の比重を占めるのかを今後も引き続き検討せねばならない問題である。

中期の大集落が分解した後、瓜生堂周辺では砂と粘土の堆積した間層の上で弥生後期の土器が出土する遺跡が幾つかみられる。瓜生堂遺跡内や若江、上小阪、山賀等の遺跡であり、これらの遺跡は中期末以後に分散した小集落の在り方を示すものかと思われる。このような状況は古墳時代前期にも引き続き、地表下1m前後の砂層上を遺構面とする遺跡が北隣りの西岩田、南隣りの若江、山賀等のなかに含まれるが、弥生中期の瓜生堂集落に匹敵するものはない。弥生後期以降は、自然環境が土層堆積にみる限り安定化の方向にあるものの、これら分散した集落が再びまとまる傾向はみることができないのである。

古墳時代中期以降の遺構面も地表下1m以内にあるが、次の歴史時代以後に盛んになった水田や集落の整地作業のために、遺物が混在して出土する場合が多い。そのため、巨摩廃寺下層



第2図 周辺の遺跡 1:25,000



第3図 調査対象地位置図 1:10,000

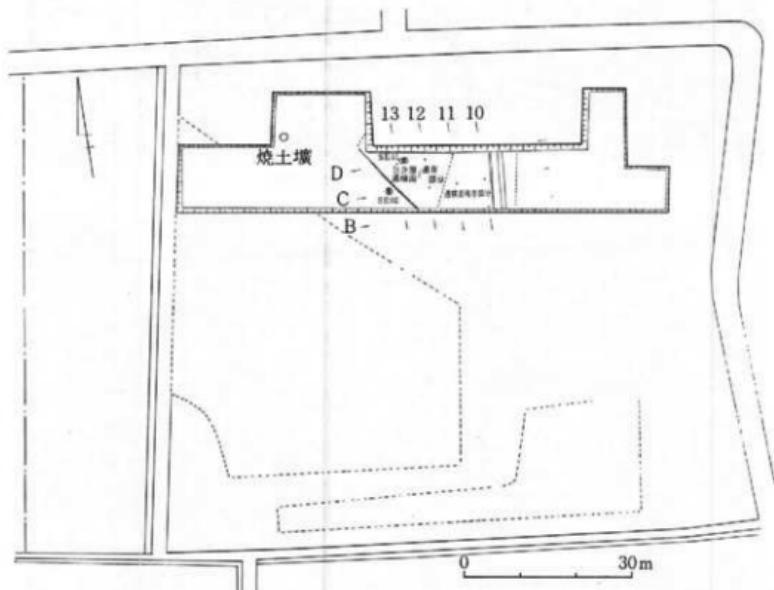
や岩田等の遺跡で出土した埴輪についても、使用状況は判然としない。

歴史時代については、瓜生堂遺跡内の東側で「若」の墨書き土器が出土したことから、付近に郡衙が存在した可能性が指摘されている。奈良～平安時代の遺構や、遺物は、瓜生堂、巨摩磨寺、若江周辺でみられ、同時期の「若江寺」が存在した若江遺跡では鎌倉時代以後に大規模な整地を伴った中世集落が発展をみるようである。

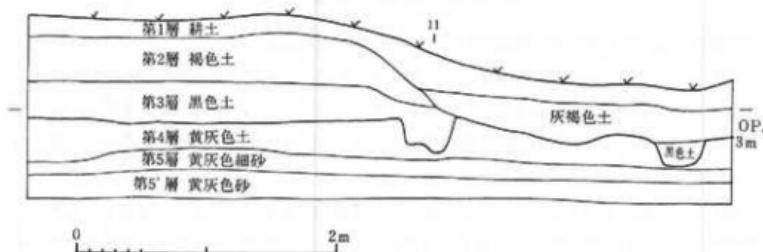
以上のように、瓜生堂周辺の環境は、地理的、歴史的にも下層の弥生前、中期と、上層の古墳時代以降とでは大きく異なっており、遺跡は下層と上層の範囲とでは拡がりや密度に違いがあることを認めた上で、今回の調査地を瓜生堂上層遺跡の一つとして報告したいと思う。

### III 調査の概要

発掘調査は、昭和53年1月から約3ヶ月間にわたり、校舎建設予定地約1000m<sup>2</sup>において実施した。調査地点は、弥生時代の方形周溝墓群が存在する小阪ポンプ場付近から南西に約400m離れており、遺跡の中心部との間には旧大和川の一つである楠根川が存在するため、これまでに遺跡範囲内で検出されている古墳時代以降の集落跡とは川を隔てた位置にある。以下に調査の概要述べていきたい。



第4図 調査地区平面図



第5図 北壁断面図

## 層序

調査地区のなかで、歴史時代の遺物包含層及び遺構面が遺存する範囲は、全体の約1%である。これは、包含層や遺構面が、水田よりも50cm程高い畠地の下を中心として残り、水田部分については削平や耕土の攪拌などによって搅乱されているためであるが、その理由としては、古代以来の耕地開発が微高地を畠として残す一方で、その他を水田面として削平、整地する方法によったためと思われる。さらに、近世になって盛んになった綿作栽培のために、水田耕土を掘き上げて新規の畠が造成されたことも大きな原因である。

畠地部分の層序は、第1層が耕土。第2層が褐色土で陶磁器を含むもの。第3層は黒色土で奈良～平安時代の遺物包含層。第4層は黄灰色土で砂と粘質土が入り混ったもので、和同開珎や奈良時代の土器が埴輪と混在する整地層である。第5層は黄灰色砂層で無遺物である。これらの層序のなかで、柱穴群や井戸を検出した遺構面は第4層上面で、今は原位置を動いている埴輪が本来使用されていたのは第5層上面であったと思われるが、埴輪の原位置は、その後奈良時代の整地によって削平されたために明らかではなくなってしまったものと思われる。

水田部分の層序は、耕土の下に埴輪片から近世遺物までを混在した灰褐色土層があり、第3層と第4層はこれに置き換っている。一部の範囲では、第4層の遺構面が削られながらも残っており、本来は第4層が全体に存在したことは間違いないものと思われる。

## 遺構

第4層の上面において、多数の柱穴と井戸を1基検出した（SE01）。また、これらの遺構が残る範囲より南で、上面が削り取られた井戸を1基検出した（SE02）。

多数の柱穴は、この地に掘立柱建物が存在したことをあらわすが、建物の規模については未調査区域にまたがるものが多いために、全容を確認できないものが多い。しかしながら、これらの柱穴のなかには、井戸SE01が埋った上に柱穴を穿つたものがあることや柱穴どうしの切り合いも認められることなどから、建物の建て替えを行ないながら存続した集落跡であることがわかる。そして、遺構を覆う包含層から出土した土器には、奈良時代の土師器から平安時代の黒色土器、までが含まれるのでに対して、第4層内の土器の下限が平家時代初めと考えられることから、遺構の存続期間は大体200年前後と推定されるのである。

そこで、これら数時期にわたる遺構を識別することが重要な作業となるが、調査範囲が限られているため、ここでは井戸SE01の廃絶時を境に遺構群を前後に分けてみていただきたい。

**掘立柱建物** プランを復原できるものは少ないが、合計で5棟以上は存在したものと思われる。このうち井戸廃絶以前の可能性があるのは中央部のSB01である。1辺がN15°Eを指すこの建物は、東西3間、柱間はほぼ等間で、東から2.4m、2.25m、2.25mで全長6.9mをかかる、南北については1間分2.2mを確認した。壁際北東隅の柱穴内から腐朽しているが隆平永宝が出土した。位置関係からは、井戸SE01がこの建物に伴う可能性がある。

SB01の東側にみられる柱列も同様な主軸方位をとるもので、西側柱列が検出されなかった

ものの建物である可能性を有する（SB02）。柱穴は、いずれも長方形の掘形で、深さ30cm以上のものである。

SB01の南側に存在するSB04は、1辺の方位がN18°Eでほぼ同様な主軸方向に復原される。規模は、2間×2間、柱間は桁行が2.2m、2.9m、梁間は等間で1.75mをはかる。西南部の柱穴を欠いている。SB01との間は、柱通りで1.1mをはかる。SB01とともにL字形に配されており、併存したものと思われる。

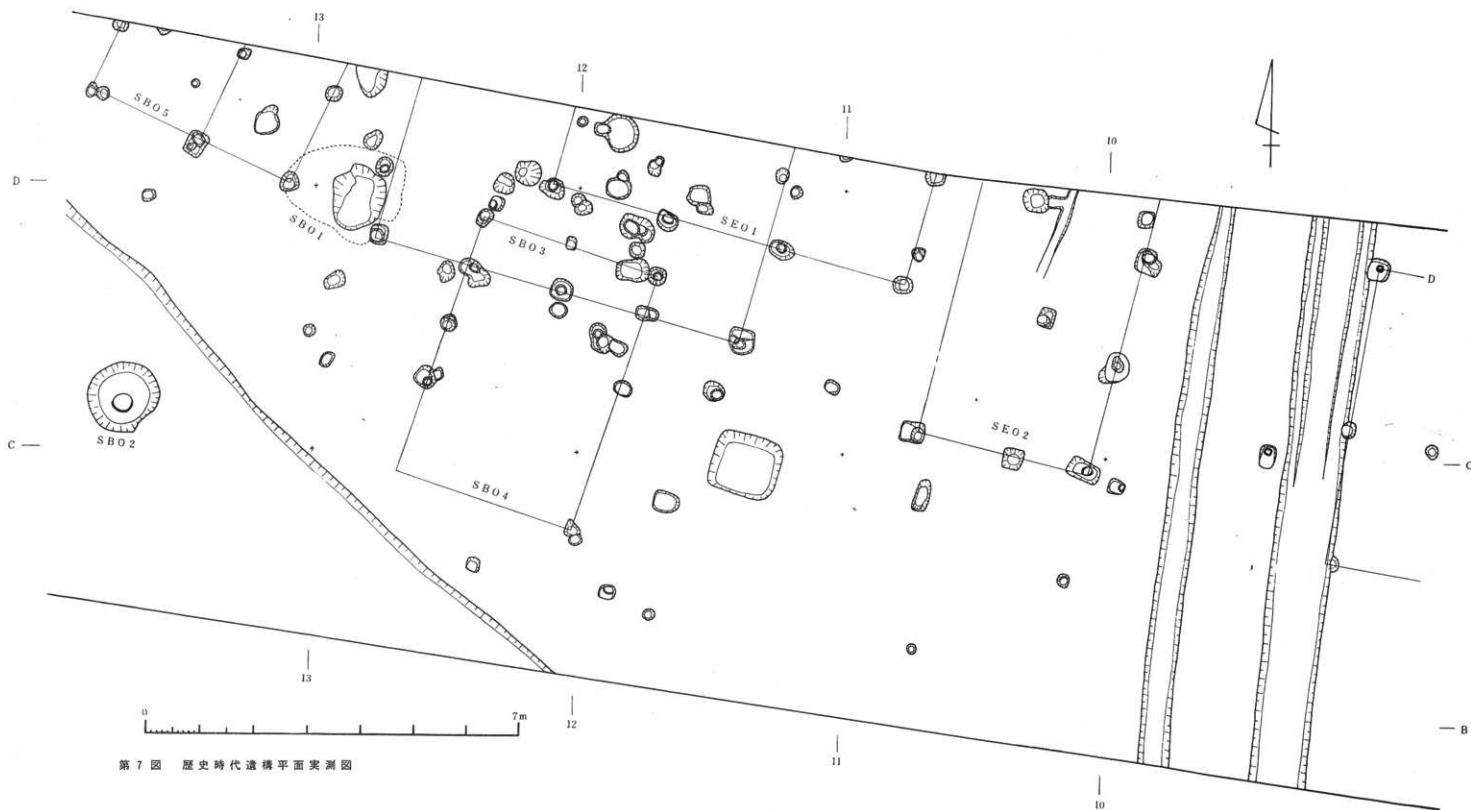
井戸廃絶後の建物として明らかなものは、SB03、05の2棟である。このうちSB03とSB05とは建物主軸の方位が違っており、時期を異にするものと思われる。ここではSB01と同様の主軸方位をとるSB03をSB01の時期に近い井戸廃絶後のものとし、これと主軸方位が異なるSB05をより時期の下るものとしておきたい。

SB03は、1辺がN15°Eをさし東西4間、柱間は等間1.8mで全長7.2mをはかり、南北方向については1.6mを1間とする柱間をみる部分もあるが、柱穴の検出状況はあまりよくない。

SB05は、1辺の方位がN25°Eを指すもので、東南隅の柱穴掘形がSE01掘形と一部重複することからみて、建物群のなかではSB03とともに後出のものと思われる。規模は東西2間、柱間は東から1.9m、2.2m、全長4.1mをはかり、南北は1間、1.85m以上である。内部に東柱を有する。

建物の可能性をもつものはこれらのはかに、中世以降の溝の東に、溝に切られた柱列があることや、SB01、SB03の内部に多数の柱穴が切り合いをもちながら存在することなどから、なお数時期の建物が存在するものと思われる。

井戸 検出された2基の井戸は、いずれも曲物枠を使用するものである。SE01は、この中から出土した銅鏡の年代や土器の型式から、使用された年代をある程度限定できる遺構である。この井戸は、曲物枠を使用する形式では初期に属しており、深さ1.7m、上部構造が縦板を並べた方形の井戸枠、下部が2段の曲物枠で構成された、いわゆる累積井戸枠である。上部の方形枠は一辺85cm、下部の曲物枠は径57cmの大きい曲物の下に径37cmの小さい曲物が底に掘えられている。この井戸の構築方法は、まず方形の枠組みを行なうに充分な広さに掘り下げ、下部は曲物枠の部分だけ円筒形に掘って2段の曲物を据えている。このうち上部の方形枠の構築にとりかかり、縦板の下端をまず埋土で固定するとともに横模を渡して枠組みを作り、順次



第7図 歴史時代遺構平面実測図



第8図 摂立柱建物跡実測図

土を埋めて固定していったものとみられる。

井戸内からは、銅鏡の隆平永宝1枚、富寿神宝4枚、承和昌宝4枚、木製の櫛、土師器、須恵器、黒色土器が出土した。出土位置は、隆平永宝が方形の井戸枠と上段の曲物との隙間に、富寿神宝と承和昌宝はそれぞれ4枚ずつのセットで8枚を重ね合わせた恰好で上段の曲物内に、櫛は隆平永宝と同じく方形枠と曲物の隙間に埋れていた。また、土器は主に方形枠内部の埋土から出土した。これらの遺物のうち銅鏡や木製の櫛は、井戸の廃絶時の儀礼に伴って埋められたものと思われ、埋土内の土器とともにこの井戸の下限を示すものと考えられる。また、曲物枠を使用した井戸は、奈良時代には少ないという平城宮の例<sup>⑤</sup>もあり、これらより井戸SE01の年代は9世紀前半と考えられる。

**井戸 SE 02** 径1.3mの円形掘形をもち、中央底部に径36cmの曲物枠一段分が残っている。この井戸は遺構面がすでに削平された地点で検出されたが、本来は掘立柱建物群や井戸SE01と同じく第4層上面より掘り込まれたものと思われる。井戸内の埋土からは黒色土器塊と土師器皿が出土しており、時期は井戸SE01より新しく10世紀と考えられる。建物群との位置関係ではSE05がこの井戸に伴う可能性がある。

**焼土壙** 調査地区の西端部で検出した。土壙周辺は第4層が削平されており建物が存在したかどうか明らかでない。この土壙も本来は第4層上面より掘られたものと思われる。径1.4mの円形を呈し、深さ0.8mの逆円錐形の掘り込み内には、焼土と灰屑が互層となって堆積しており、これらに混じて黒色土器塊、土師器小皿が出土した。時期は井戸SE02と同じく10世紀と考えられる。

**溝** 建物群が遺存する部分の東側において、遺構を切って掘られている。溝を検出した部分は第3層と第4層の大半が削平されており、溝内には黒色土と黄灰色土とがブロックで入っている。溝の走向はN 5°Eを指す。この溝が掘られた時期は明らかではないが、建物群よりは後出の中世以降のものと思われる。

以上の歴史時代の遺構に対して、古墳時代の遺構はなく、わずかに自然流路とみられる小溝を第5層上面で検出ただけである。しかしながら、出土した埴輪がかなりの量にのぼることから、第4層の整地層形成以前には当然埴輪に伴う遺構も存在したものと思われる。埴輪片が密集していたのは、第4層の整地層が残る範囲とほぼ一致するが、破片の復原では5m以上も離れたものが同一個体として接合できた例や、搔き集められたような状態で破片の集中度の高いもの、など出土状況はさまざまである。また、調査地西部の焼土壙完形に復原できる円筒埴輪5.31が潰れた状態で出土し、付近が不整形ながら盛り上がりをみる部分があつて注意するところであったが、整地された古墳の痕跡とみる手がかりは他には存在しなかった。



調査地区西部 焼土壙

## VI 出土遺物

### 1. 古墳時代の遺物

#### 円筒埴輪

円筒埴輪はいずれも無黒斑で、なかには須恵質と呼ばれるような硬質のものも含まれている。これらの観察にあたっては、中間段外面の最終調整がヨコハケのもの（A類）と、タケハケのもの（B類）とに大別し、また器高が50cmを境に起えるもの（I類）と50cm以下のもの（II類）とを区別した上で、さらにタガの形態を基準としてa～dの4類に分けて特徴をみていく。なお、器高において50cmを一応の目安としたのは、後に述べる成形方法との関係であり、I類は粘土帯の積み上げ時に一度以上乾燥のための休止を行なう方法を用い、II類は全体をいっきに成形する方法を用いる。タガ形態のa～cの分類は次のとおりである。

a類は合形に突出したダガで、3本の指頭により均等な力でヨコナデされたもの。b類は、a類よりも突出度が小さく、3本の指でヨコナデした低い合形状のものと、タガ側面のナデが弱いために側面が丸みをもつものを含む。次のc類とa類との過渡的な形態である。c類はb類での2つの傾向がさらに明確となったもので、一つはほとんど突出せず断面がM字形を呈するもの、他の一つは断面三角形状のものである。これらでは、タガを3本の指でナデるものと、2対の指でつまむようにナデるものとに明確に分かれるが、しばしば同一個体の円筒にも両者がみられる場合があるため、区別はしなかった。

a	b	c
		
5	28	26
		19
		17

表1 タガ形態の分類

A1a類  
器高が復原できたものでは、1だけが52cmをはかり器高50cmを超え、成形方法においても乾燥段階を伴う唯一のI類に属するものである。

1は普通円筒では唯一の4条のタガがめぐるもので、口縁部は欠失するが底径に対する口径の広がりの少ない同筒形をなす。この埴輪の製作は、基部に厚さ0.7cm程度の粘土帯を2枚重ねにして高さ5cmの円筒を作り、その上に3～4cm幅の粘土帯を輪積みして第3段までを成形し、第1次調整のタテハケを行なった後にしばらく休止し、底部のはみ出し粘土などを調整して乾燥を待った後再び3～4cm幅で粘土帯を積み上げて全体を成形したものと思われる。調整

は、外面がタテハケの後タガを貼り付け、そして第2段以上のタガ間にヨコハケを行なうもので、ヨコハケは工具を器面から離さずに断続的に動くものである。これから後にも述べる外面のヨコハケは、すべてこのような方法によっている。内面は、ユビケズリを行ない、上半部には器面から工具を離しながら断続的に動くヨコハケをみる。このヨコハケは第3段上部の接合痕よりも下位からみられるが、この接合痕より以上では斜上方にハケの向きが変化している。

#### AIIa 類

全体が復原できた3、5、9、10、12、13は、いずれも器高が50cm以下のII類であり、破片もI類の可能性をもつ他のは復原されたものと同様II類に属すると思われる。

3、5は3条のタガがめぐり、基部から口縁部に向って次第に聞く形態である。これらの成形は、高さ5cm程度の基部の上に約3cm幅の粘土帯をいききに口縁部まで積み上げたもので、乾燥のための休止はなかったものと推測される。そのため、基部には自重による成形時の歪みも加わっており、5のように基部が特に肉厚であるのも自重に耐えるための配慮であろう。調整は、外面タテハケの後タガを貼り付け、5は全段に3は第2段以上に2次調整のヨコハケを行なう。内面は、基底内面に粘土のはみ出しがみられ、その他はユビオサエ、ユビケズリで行ない、5の最上段内面はヨコハケ調整を行なっている。また、3の基部外面上には正立状態で強くユビナデした調整痕がある。

2、6、7は基部と第2段の一部を残すもので、2は高く突出したタガをもつ。調整は、外面については先に述べたようにタテハケ+タガ貼り付け後ヨコハケで、内面は6が斜めハケでその他はユビオサエ、ナデによる。6.7の底部は、外面を板でおさえ、6の内面は削りを加える。また6の底面には下に敷かれていた板の枠目が付いている。

4、8、9、10は、内面をいききに搔き上げたようなタテハケにより調整するものである。最上段内面では、このタテハケにヨコナデの2次調整が加わる。4の底部は、外面を板でおさえ、内面、をユビオサエではみ出し粘土を調整する。10は、胎土やハケメなどから9と同一個体と思われる。この底部外面には自重による歪みがみられ、内面はユビオサエ+削りによる調整を認める。4、9、10は乳白色～乳赤色を呈し、焼成は比較的軟質である。

12、13、23は、外面の1次調整がユビケズリによるものである。2次調整のヨコハケについては、他と変わらない。12はヨコハケ原体が明瞭にあらわっていて、幅10cm程度のものであることが知られる。23は最上段の2次調整がヨコナデによる。内面は、12が上半部乱方向のハケメ、13が最上段部ヨコハケにより調整し、23は内面に粘土帯の接合痕をそのまま残している。12、13、の最上段外面にはヘラ記号文が記されている。底部は、12が外面に正立状態によるユビナデ、内面は未調整、13が外面を板でおさえ、内面ユビオサエで調整している。

#### AIIb 類

全体が復原できた21、25、26、28は、いずれも器高が50cm以下のII類で、3段のタガがめぐるものである。その他の破片も同様の形態と思われる。

21は、1次調整がユビケズリ、2次調整がヨコハケのもので、a類のタガとした12、13よりも突出度が小さい。しかし、タガを除くと、焼成がやや軟質で乳赤色を呈するほかは、先のも

のと変わらない。最上段外側にはヘラ記号文、内面にはヨコハケがみられる。

22、24~28は、一次調整がタテハケのもので、このなかにはタガの突出度の低下やタガ側面の稜の鈍化などの傾向が明らかに認められる。

このうち26を除いた他は、タガは低いが側面の稜は有するものである。24は、器厚が薄く、1次調整は中間段において斜めハケで、最上段ではいっそう顕著となる。22、27、28は、2次調整後のタガ再調整の際に行なうヨコナデ痕が明瞭で、幅の広い凹線となって器面に及んでいるほか、内面もタガ部分で隆起帶となっており、この部分もヨコナデが行なわれる傾向がある。2次調整のヨコハケは、いずれもあまり丁寧であるとはいえないものである。22の底部に外面板おさえ、内面ユビオサエを見る。27、28は底径の小さい細身の円筒である。22は灰白色を呈し、軟質のものである。

一方、26はタガ側面の稜が鈍く、タガそのものが丸みをもっており、25はタガの形状からは26と他との中間的なものである。26は、内面の接合痕からみて、幅2~3cmの粘土帯を連續して積み上げて成形したものと思われ、また2次調整のヨコハケがところによっては器底の粘土を搔き取ることや、内面のヨコハケが口縁付近のみに限られることなど、成形やハケメには粗雑な面が少くない。底部は、外面のタテハケが下端で切られていることから、底部下端の粘土のはみ出し部分を幾つか切り取っているものと思われる。

25は、器高40cm以下の小形の円筒である。この円筒は、各段とも外面にふくらみをもつていて、これは全体をいっきに成形する際の、自重による粘土の外面へのふくらみを、タガ貼り付けによって各段がしぶられたためと思われる。外面のハケメは細かいもの(8本/cm)で、内面のヨコハケは25と同じく口縁付近のみに限られる。底部は外面未調整で歪みを残し、内面を削りによって調整する。灰白色を呈し、軟質のものである。

### BIIb 類

29、30は胎土から同一個体かと思われる。これらは幅2~3cmの粘土帯をいっきに積み上げて成形し、調整は外面タテないしナナメハケ、内面ユビケズリ+口縁付近のみヨコハケによる。タガはA類の26と同様の丸みをもったもので、タガ貼り付け後の2次調整は省略されている。底部は、外面をおさえた痕跡がみられる。

### Be 類

いずれも破片であり、全形は明らかでない。16、19は、斜方向のハケ調整の後、3本の指によってタガを強くナデつけ、ほとんど突出しない断面M字状のタガとする。一方17は、タガの突出度よりも側面の鈍化が進んだ結果、2対の指でナデつけた断面三角形状のタガとなったものである。これらは灰褐色を呈する軟質の胎土を使用する。

### 成形

以上の同筒埴輪の成形方法は、内面に残る接合痕や底部の歪み等からみて2種類あると思われる。第1は、1のように基部として5cm前後の円筒を作り、その上に3cm程度の粘土帯を積み上げてある程度の高さまで素形を作り、底部のはみ出し粘土を調整するとともに一定の乾燥を経た後、再び粘土帯を積み上げて全体を成形するものである。この種の途中で乾燥を行なう

ものは、全形のわかる出土埴輪中では1個体だけである。第2は、粘土帶積み上げ時に乾燥のための休止を経ずに全体を成形するものである。これらは器高分布において、50cmを超える1と50cm以下、40~45cm程度のその他とに分かれることから、いっくに粘土帶を積み上げる成形方法は、器高50cm以下のものに行なわれ、50cm以上のものでは底部の歪みなどが大きくなるため乾燥段階を必要としたと考えられる。このことは、高さ50cm前後の朝顔形埴輪の円筒部分をいっくに成形したために底部に大きな歪みが生じている例からも明らかである。

#### 調整

調整はタテ、ナナメ、ヨコ等のハケメとユビケズリ、ヨコナデを組み合わせて行なうもので、外面3種類、内面2種類に大別される。外面調整は(1)1次調整がタテハケ、タガ貼り付け後の2次調整がヨコハケによるもの、(2)1次調整がユビケズリ、2次調整がヨコハケによるもの、(3)1次調整のタテハケのみで、2次調整を省略するものがみられる。このうち、タテハケ+ヨコハケによるものは多数を占めており、ヨコハケの施し方には1や5のように、原体を器面に垂直にあてて丁寧にナデたものや、22、26、27、28のように原体を斜めにあてて搔いたり、26のように器面の一部を搔き削るようなあらい用い方がみられる。内面に2~3cm幅で接合痕を多数残すものには、2次調整のヨコハケも器面を搔くようなあらい用い方が多い。ユビケズリ+ヨコハケによるものは、全形のわかるものとして4個体が認められる。これらはいずれも器高50cm以下に属している。ヨコハケの用い方は1次調整にタテハケを用いものと同様であるが、26のようなあらい用い方のものはない。完形に復原された3個体すべての最上段外面にヘラ記号文を見る。

2次調整を省略するものには、原体のハケメが粗いものと細かいものとがあり、胎土やタガ形態においても違いが認められる。

円筒内面の調整は、(1)ユビオサエまたはユビケズリで器体上半～口縁付近にヨコハケを行なうものと、(2)内面全体をタテハケによって行ない、口縁付近のみヨコナデを加えるものに大別される。(1)のヨコハケは、外面調整の(1)～(3)に認められ、1のように器体の上半部に行なうもの、5、13、21のように最上段内面に行なうもの、25、26、29のように口縁付近のみに限られるものなどに分かれる。これは、成形時間の短縮や外面調整の粗雑化とも関連をもつものである。(2)のタテハケによるものは、4、9、10のように下から上へいっくに搔き上げたものがみられ、連続成形にあわせて行なわれたことを表わしている。

これらの調整に用いられたハケメ原体は、外面では3や12のヨコハケにみられる幅10cm前後の幅の広い割板であり、内面上部のヨコハケとも共通する場合が多い。内面のタテハケについては、幅2~3cmの細い割板を使用しており、内面の乱方向のハケメや、外面タテハケの一部にも用いられている。

#### 底部調整

今回出土した円筒埴輪には、成形時に乾燥のための休止を省略することで底部に粘土がはみ出た部分やはじめから調整の及びにくい下端部分を、最終調整後に再度調整したものが、かなりの割合で認められた。この底部付近の調整は、外面では板によるオサエ、ユビナデ、内面で

はユビオサエ、削り、底面の掻き取り等が認められる。これらは、正立状態で行なわれたものと倒立状態で行なわれたものとに分けられ、前者は、3、12のように底部外面付近のみを強くナデ、内面のはみ出し粘土については未調整のもので、後者については、外面に板をあて外面をはさみつけておさえる方法による4、7、13、22や、さらに内面に削りを加える6と、内面からのユビオサエを主体としてこれに削りを加える10、25がみられる。また、26のように、内面のユビオサエによってはみ出した粘土を底面で掻き取る方法をみるものもある。このように倒立状態で行なう底部調整には、いくつかの方法がみられ、これらは底部の歪みや粘土のはみ出し具合に応じて、外側からの調整を主に必要としたものは板オサエ、内面からの調整を必要としたものはユビオサエや削りを用い、両面の調整を必要とするもの以外は、どちらか一方に重点を置いて調整を行なっている。また、底部の内外面をおさえる調整方法によって底面にはみ出した粘土は、26の例のように鋭利な工具で掻き取る場合もあったであろう。内面の削りなども、鋭く削られた6の例をみると、円孔を穿つ際に使用したとされる鉄製刀子がここでも用いられたものと思われる。

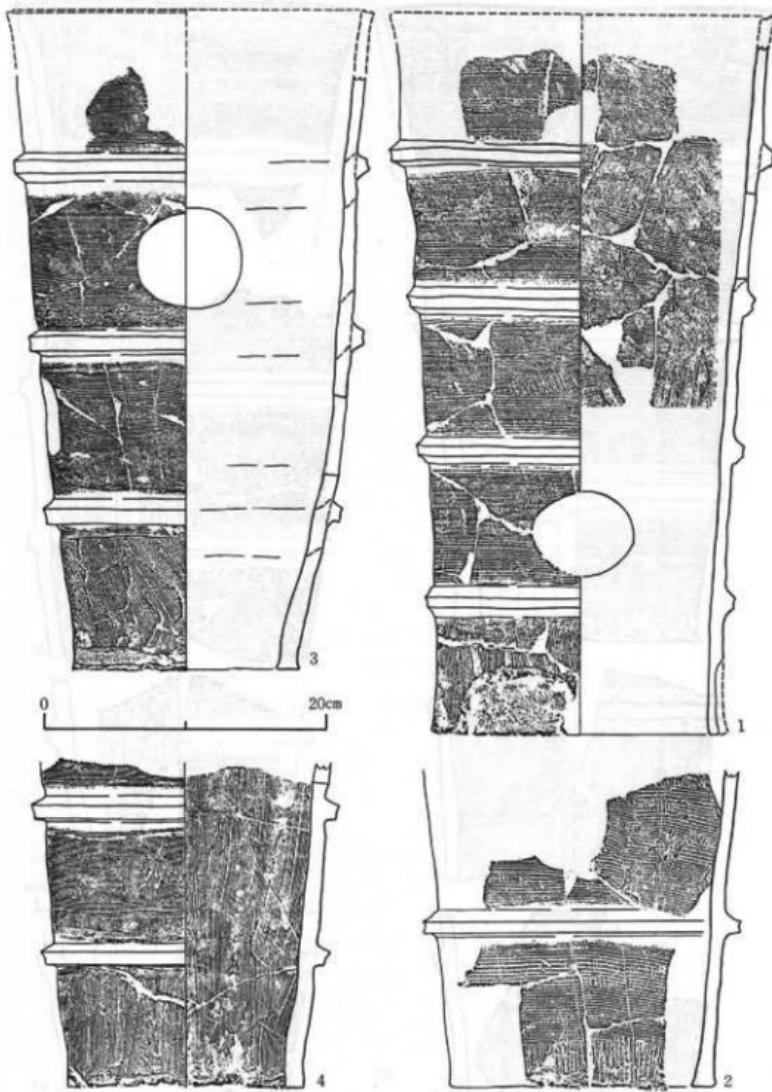
#### 器形、ヘラ記号文

完形に復原できた8個体をみると、1以外は底部から口縁部に向かうにつれて広がる器形であり、1だけが上部の広がりが少ない円筒形をなしている。これは、先に述べた成形方法とも関係し、時間をかけて粘土帯を積み上げた1に対して、連続して粘土帯を積み上げたものでは、接合時の引き延ばしなどで自然に外にひらく形態となる傾向があると思われ、実際に円筒埴輪の成形を実験的に行なった結果も同じであった<sup>⑨</sup>。また、口縁部の形態は、復原したものはすべて直口とした。これは口縁端部で外側に折れる形態が、破片中においても須恵質を呈する1点14のみであったためである。

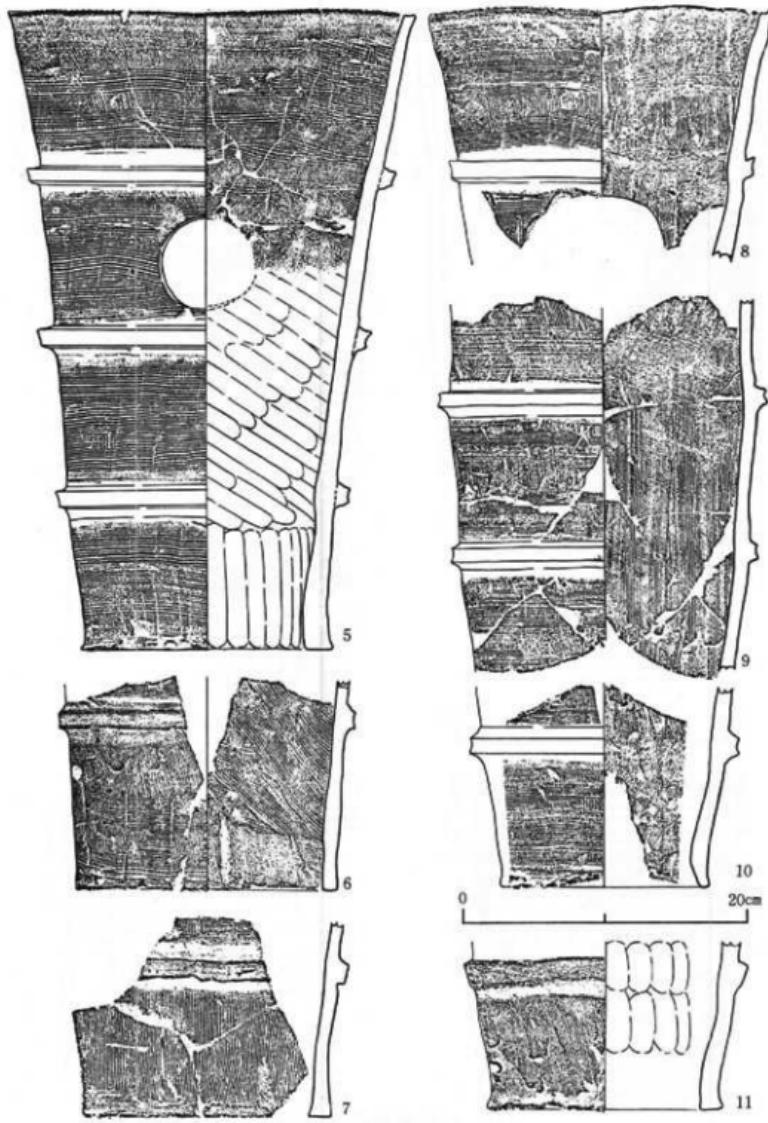
ヘラ記号文については、いずれも最上段部に記されており、圓形は須恵器のヘラ記号文のように様々である。

回数号		1	5	3	12	13	9 10	21	28	25	26	29 30
特 性	A	タテハケ+ ヨコハケ	○	○	○		○		○	○	○	
		ユビ+ヨコハケ				○	○	○				
	B	タテハケのみ										○
器 高 度	I	52										
	II		45	46	45	44	45	45	46	38	45	40
タ ガ 形 態	a	↓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	b	↑							○	○	○	
	c	↑								○	○	
内 面 調 整	上半部ヨコハケ	○			上							
	最上段部ヨコハケ		○	○	六	○		○	ナ			
	口縁付近ヨコハケ				メ				○	○	○	
	全面タテハケ						○					
底 部 調 整	無	○	○									
	正面で外側ナ		○	○			○					
	側立オサエ				○			○				
	側立オサエ+削り				○			○				
型 式	時 期				V期				→V期			
	本造跡での 分類					A			→B			
		I	+		II							
				A				→	—b—			

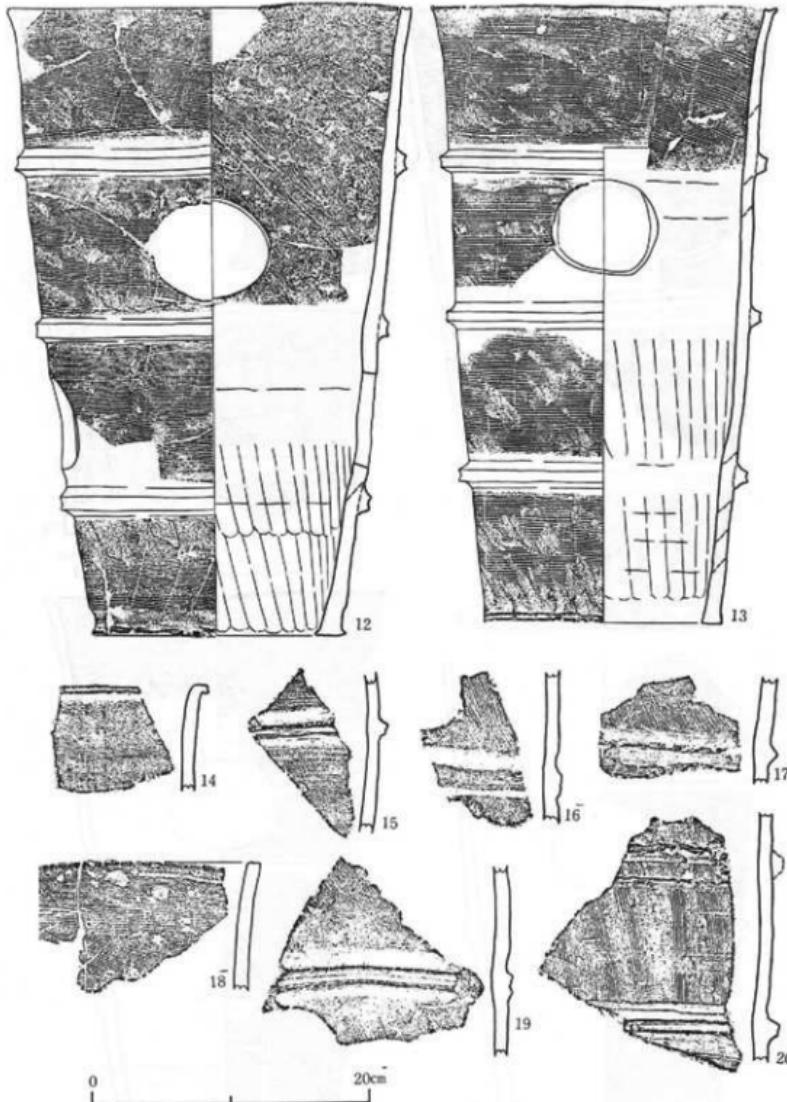
表2 主要な円筒埴輪の特徴一覧



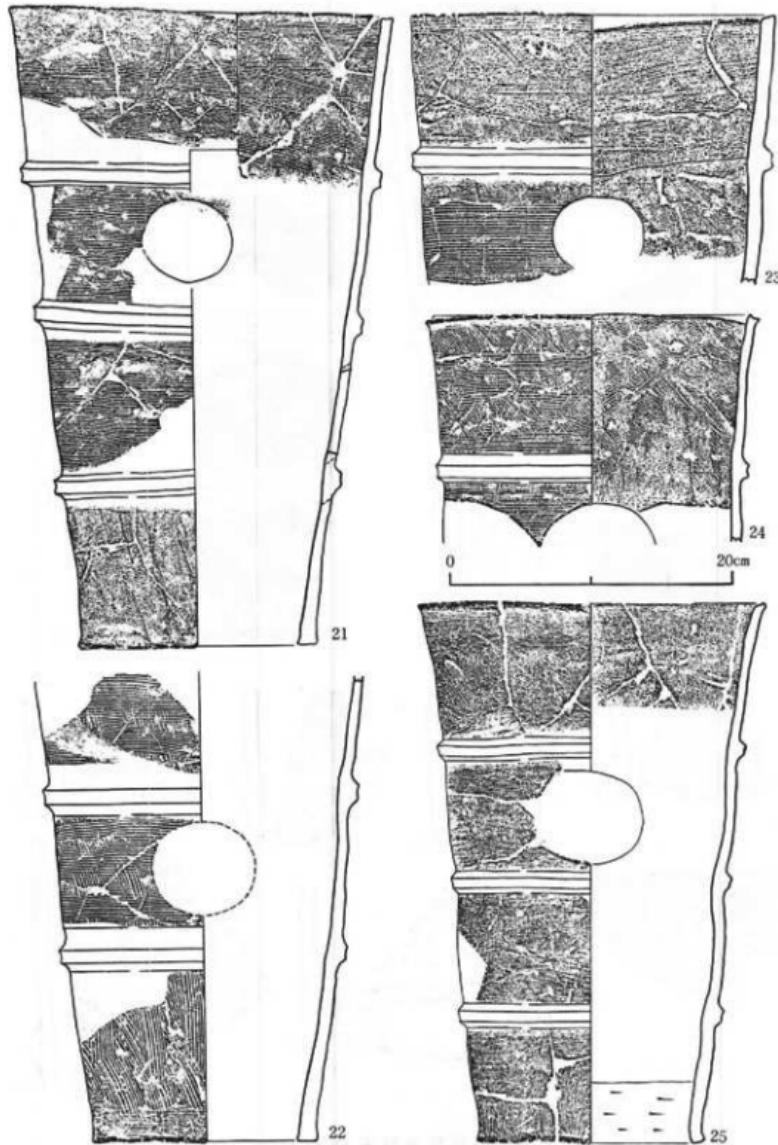
第9図 円筒埴輪実測図(1)



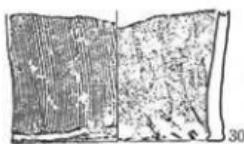
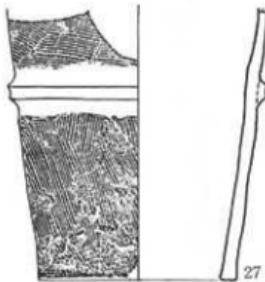
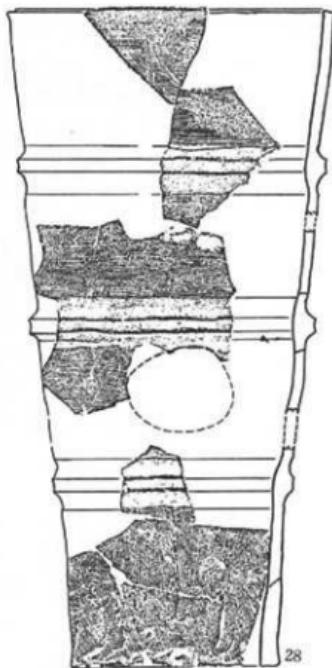
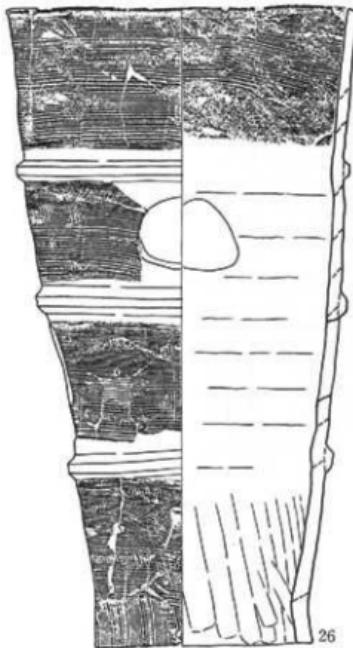
第10図 円筒埴輪実測図 (2)



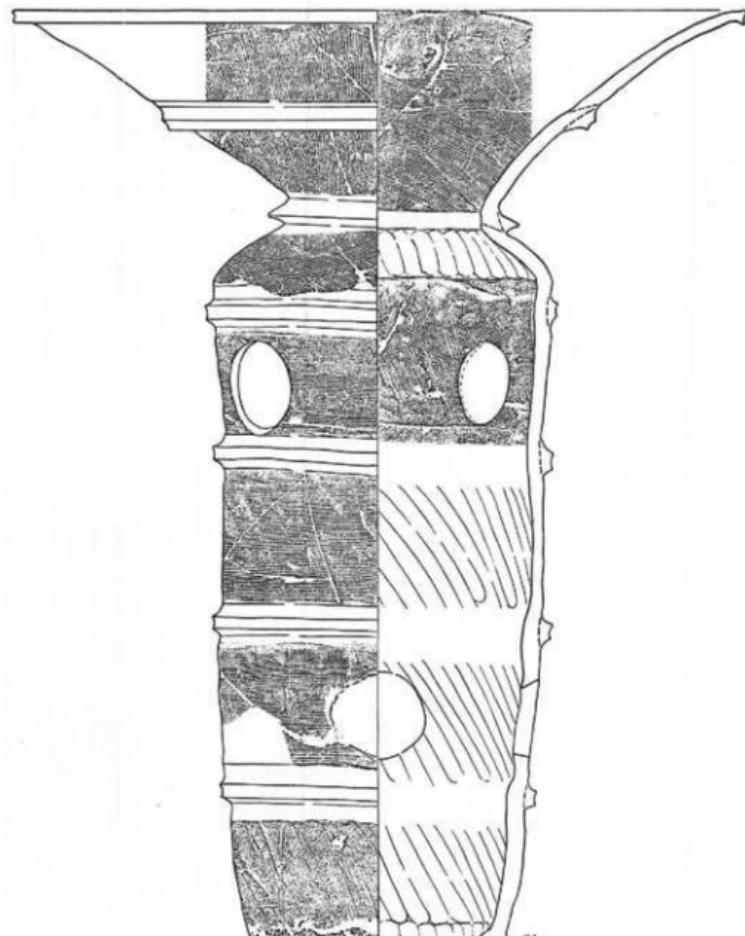
第11図 円筒埴輪実測図 (3)



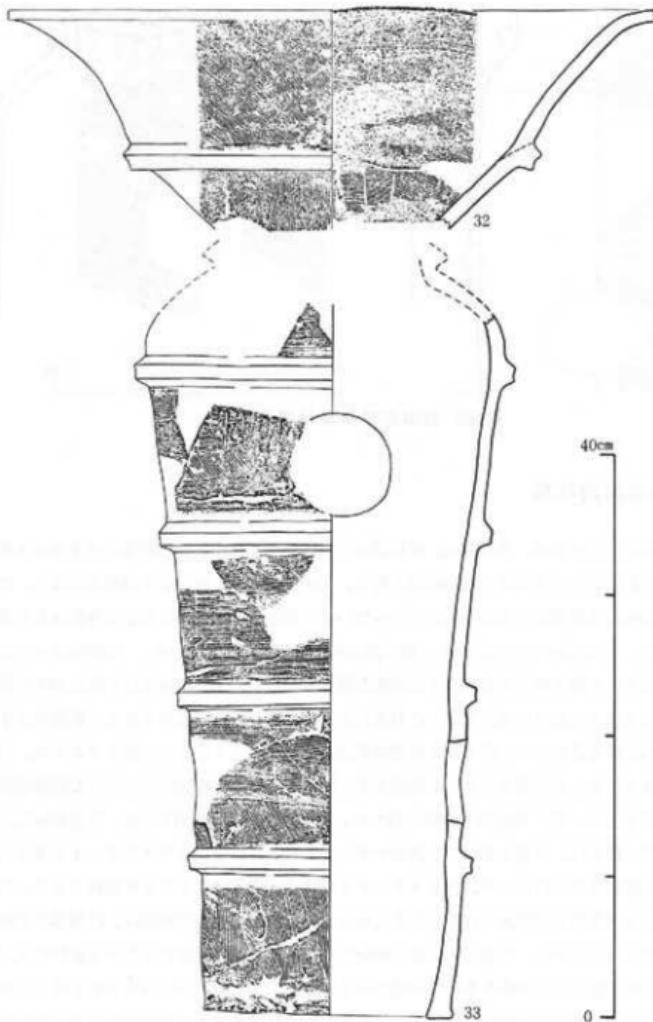
第12図 円筒埴輪実測図 (4)



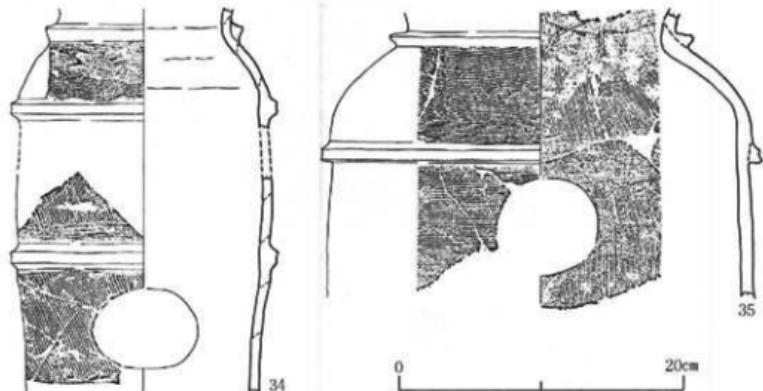
第13図 円筒埴輪実測図 (5)



第14図 朝顔形円筒埴輪実測図 (1)



第15図 朝顔形円筒埴輪実測図 (2)



第16図 朝顔形円筒埴輪実測図 (3)

### 朝顔形円筒埴輪

完形に復原された31は、器高67cm、底径18cm、口径52cmをはかる。円筒部分は4条のタガを有し、第5段目がふくらみの少ない肩部となり、その上に大きく外反する口縁部が付く。口縁部と肩部の境には断面三角形の凸帯がめぐっている。調整は、円筒第3段まで外面ユビケズリ+ヨコハケ、内面ユビケズリにより、第4段は外面タテハケ+ヨコハケ、内面斜めハケによる。この第3段と第4段とで外面の1次調整が異なるのは、粘土帶積み上げの休止がその間に行なわれたためかと思われる。しかし、自重による底部の歪みの程度からみて、乾燥が途中で行なわれたとは考えにくい。第4段の肩部は外面斜めハケ+ヨコハケ、内面ユビオサエ、口縁部は外面タテハケ、内面斜めハケにて調整する。肩部と口縁部との間には、十分な乾燥時間が存在したであろう。32、33は同一個体と思われ、器高約70cm、底径17.5cm、口径46cmをはかる。円筒部、肩部は、外面タテないし斜めハケ+ヨコハケ、内面はユビケズリ、オサエにより調整し、口縁部は外面斜めハケ、内面ヨコハケを行なう。底部は自重により潰れており、肩部までを乾燥を行なわずに成形したものと考えられる。これらの朝顔形埴輪は、円筒部の形状やタガ、成形方法などから、普通円筒の器高50cm以下のA II a類に対応するものと思われる。35は、ふくらみを有する肩部をもち円筒の径30cmをはかる大形品である。外面ユビケズリ+ヨコハケ、内面タテハケにより調整する。タガは突出した台形を呈する。普通円筒の器高50cmを超えるA I a類に対応するものである。

以上に対して、34は円筒肩部の径18cmの小形の朝顔形円筒で、円筒部は外面タテないし斜めハケのみで2次調整は省略されている。肩部ではユビオサエの上にヨコハケを直接施している。内面はユビオサ、ナデによって調整する。外面調整やタガの形態から、普通円筒のB II b類に対応するものと思われる。

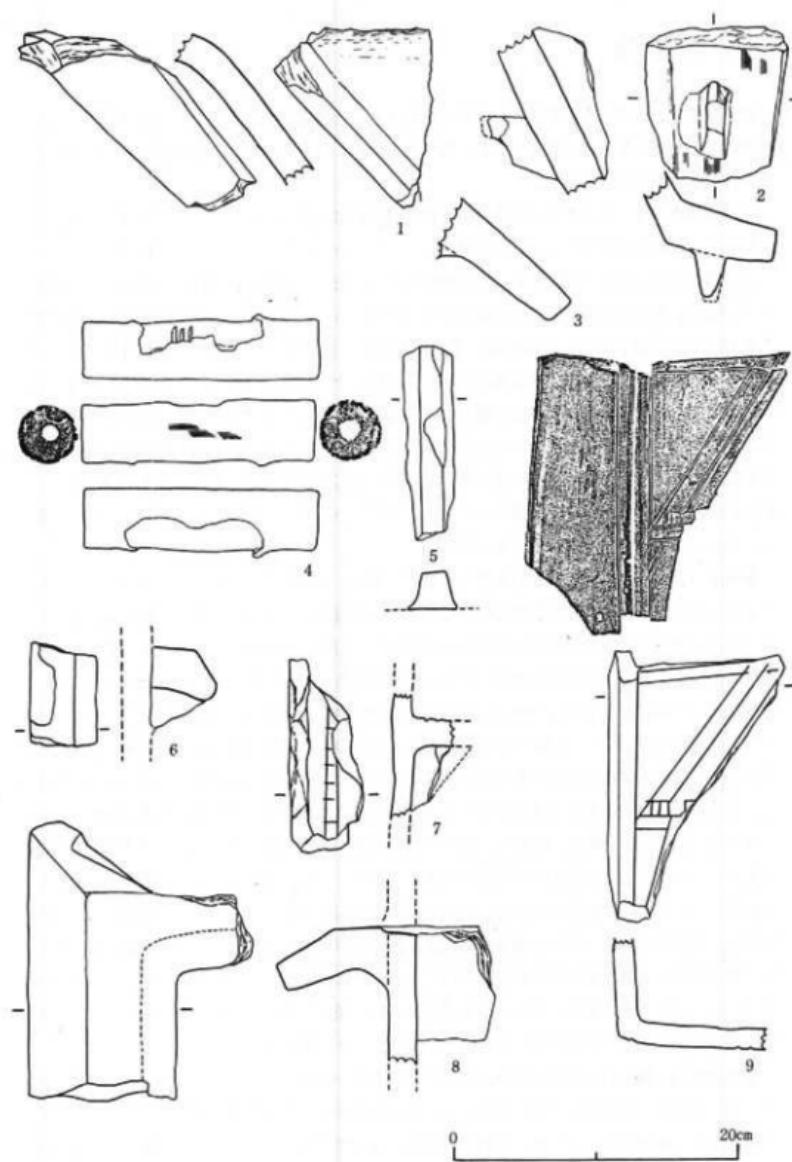
## 形 像 塗 輪

形象埴輪は、いずれも破片であり全形を復原することは困難である。それらのなかで、器形が判明したものとしては、家形、盾形、短甲形、初期、馬形等があり、細片ながら蓋形埴輪の可能性をもつものも含まれる。

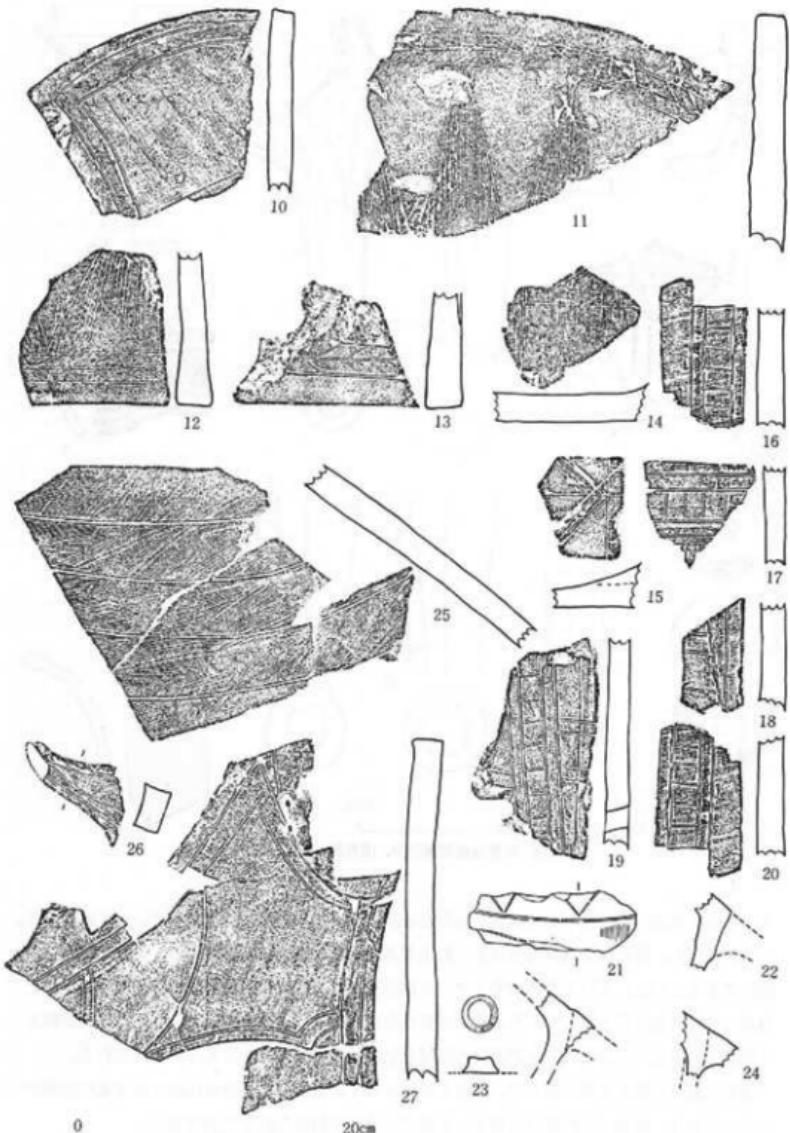
**家形埴輪1～8** 1は、入母屋造りの屋根と破風板の一部で、棟に近い部分の破片である。屋根部と破風板との接合面には、ハケ原体によって刻みが行なわれ、接合の強化をはかっている。屋根部に細ハケメ（12本/cm）がわずかに残る。灰黄色を呈し、砂粒を含んだ胎土を使用する。2も、入母屋造りの屋根と破風板の一部と思われる。妻部に突出した部分は、建築部材が破風を貫いて結合されている状況を表わすものかと解釈される。破風と屋根部に細ハケメ（10本/cm）を残し、屋根部裏面と思われる部分は粗いナデ仕上げである。黄褐色で砂粒を含む胎土で、1とは別個体。3は軒部と思われる破片で、灰白色を呈する。4は、堅魚木と考えられる。長さ13.2cm、径4cmをはかる、かなり大形のもので、これが付く家形埴輪も大形であったと思われる。円柱は中空で、心棒に粘土を巻きつけて製作したものと思われる。棟に埋まる部分にはヘラの刻みと粘土の剥離が認められる。灰黄色を呈し、砂粒を含んだ胎土は1と類似するが、同一個体かどうかは明らかではない。

6～8は、いずれも裾廻り部分の破片である。6は、壁と接する部分の上面が平坦で、側面は斜めに垂下する。下面には、壁に貼り付ける際の補強粘土が部分的に認められ、上面及び側面にはヨコハケ（8本/cm）がわずかに残っている。淡灰褐色の砂粒を含む胎土。7は、壁と接する部分で、斜めに垂下する側面の存在は不明である。上面には、ハケ調整後に2本の平行線をひき、その間を短い沈線で埋める格子状の文様が描かれている。他の裾廻り片にくらべて器厚が1.5～2cmと薄い。灰褐色を呈し、砂粒を含む胎土を使用。8は、隅角部分の比較的大形の破片である。妻側に突出する隅角は、さらにヘラ状のもので妻側を切り取って段を形成する。裾廻り台は、壁と接する上面が水平で、側面が斜めに垂下するもので、全体に丁寧な細ハケ（9本/cm）で調整する。壁部は、外面を丁寧な斜めハケ、内面をヘラ状の工具で調整し、裾台貼り付け部分以上は粘土の接合部で剥離している。一方、裾台部以下の壁体には、方形の開口部が切り穿たれていることから、この家形埴輪は高床を表現したものと考えられる。壁体厚2cm、裾台厚3cmをはかり、淡赤褐色の砂粒を含むが堅密な焼成である。この埴輪片には全体に2次焼成によるススが厚く付着しているが、これは奈良時代の整地後に火を受ける部分へ転用されているためである。5は、断面台形を呈し、底面は剥離したものである。一応、家形埴輪の柱部分と考えておきたい。淡赤褐色で砂粒、クサリ礫を含む胎土。

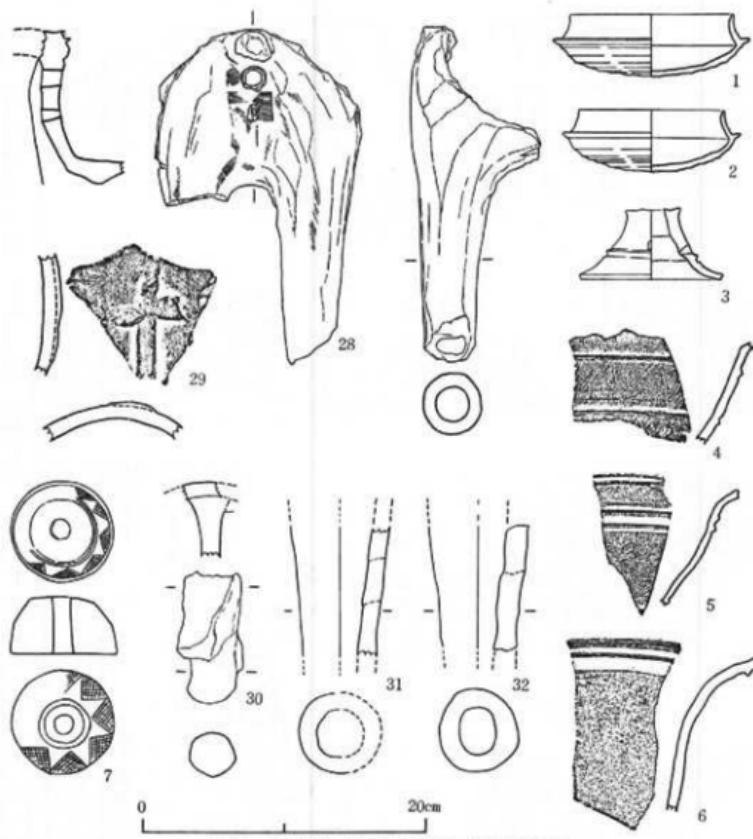
**盾形埴輪10～15** 11～13は、胎土、文様などから同一個体と思われる。また、14、15も胎土から同じ個体の一部と考えたい。11は、ゆるやかな弧を描く盾の上縁部分である。頂部より右肩部にかけて弧状に下っている。文様は、上縁に沿って3条の沈線と綾杉文を配し、その内側に鋸齒文と山形文を描き、鋸齒文と山形文で区切られた内部を直線でうずめている。表面はナ



第17図 形象埴輪実測図 (1)



第18図 形象埴輪実測図 (2)



第19図 形象埴輪実測図(3)、須恵器、石製品実測図

デによって平滑で、丹塗りの痕跡が認められる。裏面は斜方向のユビケズリによって調整する。灰白色を呈し、砂粒を含んだ特徴のある胎土である。12、13は眉の下縁部で、13は左隅部分の破片である。15は、平行線を沈線でうずめた格子文と4条1組の斜線文を山形に配するもの。14は、沈線で格子目を描いたのち、格子目をさらに沈線でうずめた文様と、4条1組の斜線などで構成されたもので、これらは锯歯文を外区とする眉の内区にあたるものかと思われる。

10は、弧状を描く眉の左肩部で、表面をユビケズリ、ナデの後、外縁に沿った2条の沈線がめぐっている。表面には丹塗りが残る。赤褐色を呈する精良な胎土を使用する。

觀形埴輪27、9 27は、初形埴輪上部の飾り板部分と思われる。表面は、ユビケズリやナデによって平滑にした上に、2条1組の弧線をひき、この弧線によって区画された内側にも弧

状の沈線が描かれている。裏面には、支柱粘土が貼り付けられていた痕がある。表面には丹塗りが残る。赤褐色を呈する精良な胎土を使用。9は、箱形の部分で、一応切形埴輪前面の一部と考える。前面は斜方向と横方向に3条1組の沈線をひき、横線の一部には沈線でうずめた格子状文とする。側面には垂線が2本みられる。表面に丹塗りを残し、黄灰色の精良な胎土である。

**短甲形埴輪25、21** 25は、表面斜方向のハケメの後、同心円状に5本の沈線がめぐり草摺部分と考えられる。直径は、下の沈線で約60cmをはかる。裏面はユビケズリにより調整する。淡灰褐色を呈し、砂粒を含む胎土。

21は、笠状部分と円筒部分の接合部破片であり、上部にひかれた三角形状の沈線からは三角板を使用した短甲の表現とも考えられる。これと同様の笠部剝離部の破片22、24は、蓋形埴輪の可能性もある。

**ひれ26** どのような器形に付くか不明であるが、飾りひれの一部とみられる。表面は弧状の外縁に沿って沈線がひかれ、裏面はユビナデ調整のみで文様はない。表面に丹塗りが残る。胎土は27の切形埴輪に類似する。

**動物埴輪28~31** 28は後脚部分、29は馬形埴輪の草紐の交差部で、交点には剝離痕が認められることから、本来は辻金具の表現があったものと思われる。30は尾、31、32は足である。29のみ灰褐色、その他は淡赤褐色を呈する。

**不明埴輪16~20** これらは2条1組の沈線を平行にひき、その間を直線で区切る格子文を施すもので、胎土からは9に類似する。19には梢円孔が穿たれている。23は、鉢留短甲の鉢か馬具の一部の可能性はあるが不明である。径2.4cm、厚さ1.2cmで、中心部分がやや窪んでいる。

## 須 惠 器

**杯1、2** 1は、浅い体部に内傾したのち立つたちあがりが付き、口縁端部には鈍い段をもつ。体部外面は、ほぼ全体を丁寧に回転ヘラ削りし、内面は底面のみユビナデ、その他は回転ナデにより調整する。器厚は全体に均一で、薄手である。2は、やや小形で、少し丸みをもった体部に内傾するたちあがりが付き、口縁端部にわずかな段をもつ。体部外面の $\frac{1}{4}$ を時計回りに回転ヘラ削りし、内面は底面のみユビナデ、その他は回転ナデによる。1よりも体部はやや厚手である。いずれも青灰色を呈し、堅緻な焼成である。

**高杯3** 無蓋高杯の脚部。なだらかに裾が広がる脚部で、脚柱と裾との境を実線によって区分し、裾端部はそのまま面となっておわる。梢円形の孔を4方向に穿っているが、貫通するの1孔のみで、他はヘラ先による刺突としておわっている。内外とも回転ナデによって調整し灰青色の堅緻な焼成である。

**器台4、5** 器台の鉢部である。4は、「く」の字に外反する口縁部から鉢部上半にかけてのもので、外面に2条の突線と実線間に沈線による锯歯文、その下方に櫛の刺突による山形列点文を描き、锯歯文内を斜線でうずめている。5は、ゆるやかに外反する口縁部から鉢部上

半にかけてのもので、口縁端部はそのまま面となっておわっている。外面に、2条1組の突線と3条の櫛描き波状文がめぐり、その下方にも突線がみえる。いずれも灰青色の堅緻な焼成である。

**甕6** ゆるやかに長く外反する口縁部片で、端部近くに1条の突線がめぐる他は装飾を有しない。内外ともユビナデ、ヨコナデにより調整する。暗青灰色の堅緻な焼成である。

**石製品7** 滑石製の紡錘車が2点と緑色片岩質の紡錘車が1点出土している。このうち、滑石製の7には表裏に鋸歯文が描かれ、文様内を斜線でうずめている。

## 2. 歴史時代の遺物

第3層と第4層から出土した遺物は、先に述べた埴輪や古代の須恵器の他に若干の古墳時代後期の須恵器を混えるが、大部分は奈良～平安時代に属するものであった。また、遺構内からは主に平安時代の遺物が出土した。これら歴史時代の土器には、土師器の杯、皿、塊、鉢、甕、羽釜、須恵器の杯、蓋等の器種が認められる。

### 土師器、黒色土器、瓦器

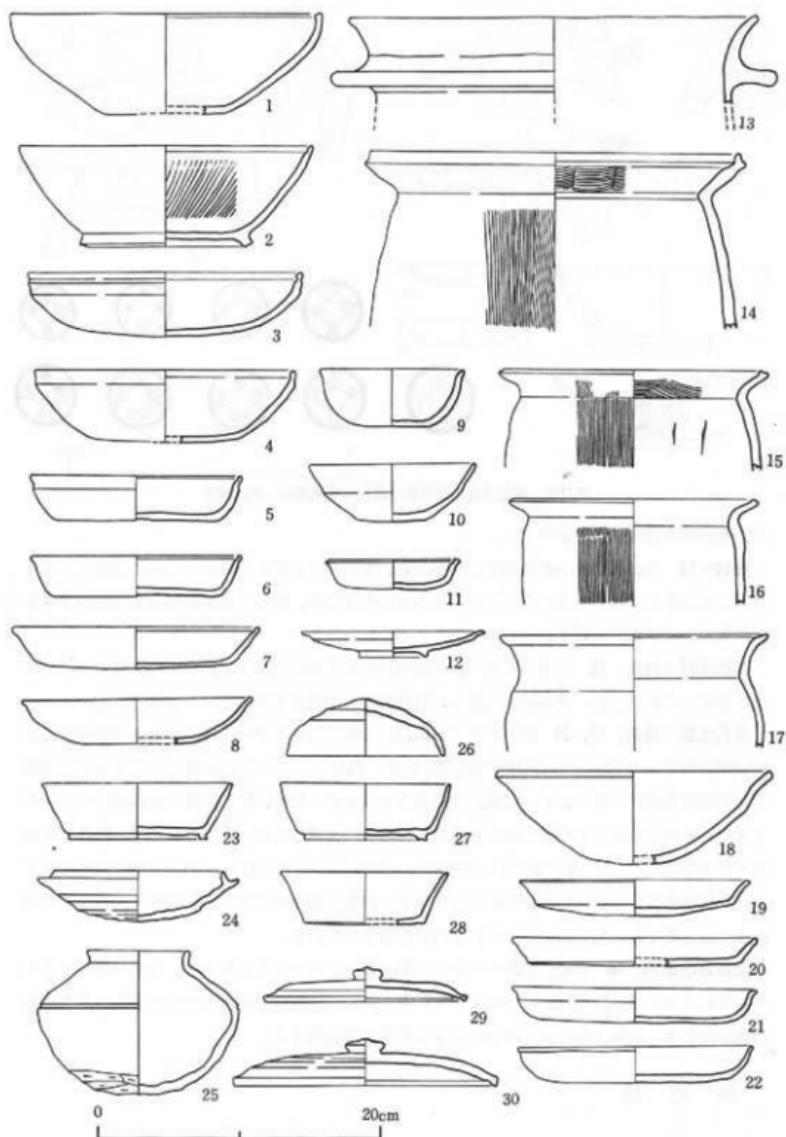
**杯2、5～8** 平底の杯5～8と、有高台の杯2とがある。有高台の2は、c手法<sup>⑨</sup>により調整し、その上に全体にヘラミガキする。内面に斜方射状暗文をみる。5～7は、平底に外傾する口縁部が付き、端部を内側に巻き込む。調整は、口縁部をヨコナデする以外未調整である。このうち7は口縁部の外傾化がすんだもの。8はさらに外傾化が大きくなり、口縁上部のみを強くヨコナデするe手法で調整している。有高台の杯は、口縁端部内面に凹線がめぐるもので、削りの範囲が全体に及ぶc手法により調整する。さらにその上を全体的にヘラミが+している。

**塊3、4、9、10** 丸底との平底の2種があり、いずれも内縁する口縁部が付く。3、4は、口縁上部のヨコナデが強く、端部内面には凹線がめぐっている。調整はc手法によるが、口縁上部のヨコナデ部分には及んでいない。小形の10は口縁部をヨコナデする以外未調整。

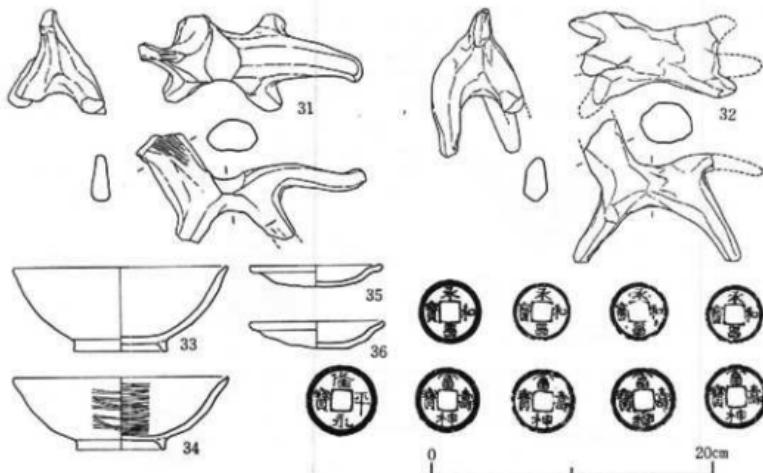
**皿11、19～22** 広い平坦な底部に短く外反する口縁部が付くもので、底部から口縁部にゆるやかに移行する11、21、22と、底部と口縁部の境に稜をもつ19、20とがある。口縁端部がわずかに外反するもの、内側に巻き込むもの、そのまま丸くおわるもの等があり、いずれも口縁部をヨコナデする以外未調整である。

**鉢1、18** 1は小さい平底に内縁する口縁部が付く、端部は内面に肥厚する。c手法で調整し、その上にあらいヘラミガキを全体に施す。18は井戸S E01内出土。丸底で、口縁上部のみを強くヨコナデし、以下は凹凸を残すe手法により調整する。

**羽釜13** 長手の胴部に、わずかに外反する口縁部が付く、胴外面のタテハケ後口縁部との境に鈎を貼り付けている。口縁内面にヨコハケを残す例も他に認められる。茶褐色を呈し、金雲



第20図 歴史時代、古墳時代の土器 1、4、7、9、14、20、22、23、第4層出土  
土8、12、18、19、SE01出土。他は第3層出土。



第21図 黒色土器、土師器小皿、土馬実測図、銅錢拓影

母、角閃石を含む胎土を使用する。

壺14~17 脊部外面をハケ調整する14~16と、ユビオサエによる17とがある。前者は、短く外反する口縁の端部をつまみ上げないしは内側に巻き込み、後者は口縁と脊部との境のヨコナデが強く、くびれ部となる。

**黒色土器（内黒）12** 有高台の皿で、口縁端部はわずかに外反し、内面に暗文様のヘラミガキを施す。外面黄灰色、内面黒色を呈し、精良な胎土を使用する。井戸SE01内出土。

**黒色土器（両黒）33、34 33** は井戸SE02内より出土したもので、内外面とも炭素の吸着が十分ではなく、土師器との中間的な色調をなす。器形はしっかりした高台を有する深い塊形で、器厚は全体に厚ぼったい。口縁上部外面をヨコナデした後、底部を除いた範囲をヘラミガキする。内面は全体ナデ調整。34は調査地区西端の焼土塊内より出土したもので、内外とも黒色を呈する完全な黒色土器である。器形はしっかりした高台を有し、34より浅い塊形を呈する。口縁端部内面には浅い沈線がめぐっている。底部の器厚はやや薄い。底部外面を除いた範囲をヘラミガキし、内底面のミガキは平行に行なわれている。

**土師器小皿35、36** 黒色土器塊35と同じく焼土塊内より出土したもので、完形の皿が5点ある。これらは直径9.5cm前後で、凹凸を残す残い体部に、短かく外反したのち内側へ巻き込む口縁部が付き、口縁上部を強くヨコナデするe手法で調整する。

### 須 恵 器

壺25、杯24、蓋26が古墳時代後期で他は歴史時代の須恵器である。杯には有高台の23、27平底の28がある。28は底部にヘラ切り痕が顕著な灰白色軟質のものである。蓋29、30は天井

部につまみをもち、口縁端部は下方に肥厚する。

以上に述べた歴史時代の土器は、這構内のものと整地層（第4層）、包含層（第3層）出土のものを含んでいる。このうち年代がある程度限定できる資料は、2基の井戸と焼土壇より出土した土器だけで、他の整地層や包含層の土器にはかなり年代幅をもつ各種の土器が含まれている。そこでこれらの土器を、時代的な特徴のよくわかる土師器の食器類を中心にみていくたい。

まず年代幅の限られる資料をみると、井戸S E01より出土した土器は、土師器では丸底でe手法による鉢、口縁部のヨコナデ以外未調整の皿、口縁部の外傾化が大きいe手法による杯などで、これに黒色土器（内黒）の高台付皿が伴っている。この井戸内からは、土器の他に井戸廻絶時に埋められたと思われる3種類の銅鏡が出土しており、最も新しい承和昌宝の時期（835年初鋲）をこの井戸の下限と考えると、土器の年代は9世紀前半と考えられる。また、高台付皿の類例が9世紀前半に比定される平城宮溝SD650A<sup>④</sup>から出土していることも参考となる。他に、井戸S E02と焼土壇内から黒色土器塊と土師器小皿が出土しており、塊は両面が黒色の10世紀代のものである。

一方、整地層や包含層より出土したものでは、食器類がその調整手法によりおよそその年代を推定できる。それによれば、有高台の杯、大形の塊、鉢にはc手法が用いられ、平底の杯、皿、小形の塊に口縁部以外未調整のものが多い特徴が認められる。c手法は平城宮IV<sup>⑤</sup>以後に調整手法のなかで主体をなすもので、平城宮VIに編年される長岡京の諸造構出土の土器にはきわめて高率となる<sup>⑥</sup>。また、口縁外面のヨコナデ以外未調整の手法は、古くからの木葉底手法（a手法）とは異なり奈良時代末以後増加するものである。この他、図化できなかった破片のなかに斜方斜状暗文をもちc手法による蓋もある。

これらのことから、食器類全体としての年代観は、8世紀後半～10世紀にかけてのものと考えられる。そして、整地層の土器と包含層の土器を比較すれば、整地層にはSD650 A期以降のものは含まれず、平城宮VIかVII段階の土器は両層に含まれることから、整地の終了とそれにひき続く集落形成の境も奈良時代末か平安初頭にあったものと思われる。食器類以外の器種では、羽釜や甕14～16が奈良時代的で脚部ユビオサエの甕17のように平安時代的なものもある。なお、羽釜の年代観については皿池遺跡の報告で詳しく述べてある。

土器以外では、土馬が2個体、銅鏡が11枚、木製の櫛が1点出土している。土馬は2点とも尻尾が垂れるが、形状や寸法からは尻尾が上がる直前の奈良時代後半のものと考えられる<sup>⑦</sup>。灰褐色土層より出土。銅鏡は、整地層内より腐朽した和同開珎が1枚、造構面の建物SB01柱穴内より腐朽した隆平永宝が1枚出土し、井戸S E01よりその他が出土した。井戸内の銅鏡は、最も古い隆平永宝が796年初鋲、富寿神宝が818年初鋲、最も新しい承和昌宝が835年初鋲である。これらは承和昌宝の鋲造期に井戸の廻絶に伴う何らかの儀礼の際に埋められたものと思われる。同じく井戸内出土の櫛は細かい歯をひき出したもので、櫛を井戸内に投入することも各地の発掘例のはかに民俗例などにもみられる。

## V ま と め

今回、瓜生堂上層遺跡の調査において、歴史時代の遺構、遺物と整地による遺構面形成以前の埴輪等を多數検出した。これらを調査の成果としてまとめると以下のようになる。

1. 調査地においていちばん古い段階の資料として、古墳時代の円筒、朝顔形円筒、形象の埴輪と須恵器、石製軒轅車がある。このうち円筒および朝顔形円筒埴輪の特徴は次のように整理される。まず、焼成はいずれも無黒斑の窯窯焼成で、茶褐色ないし赤褐色の硬質のものが多く、なかには暗紫色の須恵器と同様のものも含まれている。従って、これらは埴輪に窯窯焼成の技術がもち込まれる第IV期<sup>9</sup>以後のもので、実年代では5世紀後半を主体として6世紀前半のものも含んでいる。

一般に第IV期以後の埴輪は、窯窯導入初期のものを除くと、器形が小形化する傾向が認められる。今回出土した円筒埴輪の器形も、器高が50cmを超えるI類の1個体を除いて、他は器高45cm程度あるいは40cm以下のII類であり、窯窯普及期の小形化したものであることがわかる。しかしながら、円筒埴輪が小形化する理由は、窯窯の普及のみではなく、他の要素も働いていることが円筒埴輪の成形過程から知られる。すなわち、器高50cm以上のI類では第3段までを3cm程度の粘土帯を積み上げて成形し、ここで一時乾燥のために休止するのに対して、器高45cm程度や40cm以下の個体では2~3cm幅の粘土帯をいきに口縁部まで積み上げて成形し、調整に移るという違いがみられるのである。この技法上の違いは、器形の大きさと製作の容易さにもとづくものと考えられ、連続成形法をとるII類に最終調整後に底部の歪みを調整する過程が認められることから推察すれば、大形の円筒を連続成形することは、当然底部付近の変形も著しいものとなり、製作の能率からも適当ではなかったものと思われる。また、このことを裏づけるかのように連続成形法による朝顔形円筒埴輪の円筒部分が高さ50cm前後をはかり、その底部にかなりの歪みを残すことからみると、本遺跡の復原された埴輪では、高さ45~50cmを連続成形法の限界としていたようである。

このように、窯窯で焼成し外面の2次調整にヨコハケを用いる第IV期の円筒埴輪は、成形において乾燥のための休止を残す器高50cm以上のI類と、連続成形法によるII類とに分けられ、後者の技術は次の第V期に続くことから埴輪製作の一つの画期をなす技法とみられるのである。

円筒埴輪の調整方法については、大きく分けて外面に3種類、内面に2種類が認められた。このうち外面をタケハケ+ヨコハケで調整するものが多く、そのなかにもヨコハケの施し方に精粗があり、成形に乾燥段階をもつものや、タガの形態を3種類に分けたなかのa類では丁寧で、連続成形法のb類タガをもつものには粗いものみられる。また、外面をユビケズリ+ヨコハケの調整法は省略化の傾向ともみられるが、他の要素では、連続成形法の2次調整ヨコハケのものと異なるところが認められなかった。内面調整では、上半部~口縁付近にかけてのヨコハケが、乾燥段階を有するものにおいて最も広い範囲に用いられ、連続成形法のタガa類か

らb類にかけて次第に使用部分が限られてくる。以上の調整やタガ形態の変化は、外面の2次調整を基準として第IV期と第V期を区分する縦年案によれば、第IV期のタガb類や口縁内面のヨコハケなどに第V期と共に通する要素がすでに認められるように、連続成形法の出現以後は外面2次調整を行ないながらも、その他の要素は第V期へと指向していることが認められるのである。

また、連続成形法をとるものには、先にも述べたように底部調整を行うものがかなりの割合で存在しており、大きくは正立状態で行なうものと倒立状態で行なうものとに分けられる。調整方法は、底部の歪みや粘土のはみ出し具合に応じて種々の方法が用いられたものと思われ、第V期の円筒埴輪に典型的な底部がU形をなすものはない。その点では、連続成形法で器体の成形が画一化するなかにも、いろんな手法を用いて個体に応じて細部を調整する本遺跡の円筒埴輪は中期の埴輪の名残りをもつものであろう。

以上のような特徴を有する本遺跡の円筒埴輪は、当時どのような状況のもとで出現したのであろうか。その意義について、次に同様な窯窓で生産が行なわれつつあった須恵器との比較において検討したい。

本遺跡出土例のような小形の円筒埴輪が出現する頃、須恵器は需要の拡大を迎えていた。そのため初現期のように1個あたりの製作時間の長い、手作り的な要素を残すものから次第に製作の能率化をはかる方向へ製作技法を変化させ、短時間に大量生産できるように対応していった経過が認められている<sup>9)</sup>。その意味では、須恵器の製作技法の流れは、生産の掘鑿期をすぎた以降は、需要の動向をつかんで生産する器種を選択し、器種を定形化しつつ大量生産化の方策を追求するという一つの方向にあったことは明らかである。これに対して、円筒埴輪も初期の窯窓導入期のものは、ウナベ古墳のように大形で古式の器形をとるものや第III期の器形と変わらずただ焼成のみが窯で行なったものであり、この段階から連続成形法による小形化した段階への移行は、須恵器における生産工程の能率化の方向と基本的には同じ傾向をもつものと考えられる。しかしながら、円筒埴輪では、すべてについて連続成形法による小形化したものに移るのではなく、第IV期、第V期を通じて大形円筒の需要は完全にはなくならないために、乾燥段階を必要とする成形技法も併存しながら6世紀中頃まで続くことが特徴であり、その点が一元的な須恵器の技法変化との違いである。これは須恵器が日常的な用器として受け入れられていったのに対して、埴輪はあくまで非日常的な古墳に付属するものであったためであり、第IV期から第V期にかけての円筒埴輪全体にみる相対的な小形化を大量生産の傾向とするのみでは解釈できないものである。従って、必ずしも一元的な型式変化としては把えきれないこの時期の埴輪を、連続成形法の出現を一つの基準として、この手法にもとづく小形化の系譜と、旧来の技法にもとづく大形埴輪の系譜とを区分した上で、須恵器と同様に生産の能率化への努力を認める小形のものについては、これをすすめる契機となる需要側の動向も必ず存在したものと考えるのが妥当ではないかと思われる。近年、大阪市長原遺跡で発掘調査された小形方形埴輪による古墳群から出土した小形の円筒埴輪<sup>10)</sup>や今回瓜生堂上層で検出した埴輪等これ迄埴輪の出土が予想されないような所で検出された例にみると、円筒埴輪小形化の一因は、雄大な

首長墳造営のための埴輪生産以外のところでも存在したことに注目する必要があると思う。

2. 一方、形象埴輪には、家、盾、韁、短甲、馬などの器形が認められた。家形埴輪は、胎土や特徴から少なくとも4個体以上はあるものと思われる。そのなかでも堅魚木部分が出土した家は、堅魚木の寸法からみてかなり大形のものとみられ、羽曳野市墓山古墳発見の家形埴輪<sup>①</sup>のように中空の堅魚木をもつ。また、歴史時代に転用されてススが付く裾廻り部も大形の家に付くもので、これは裾台以下の壁面を方形に切り穿つ部分があることから高床の家を想定させるものである。

盾は2種類認められた。一つは、上縁が山形を呈する灰白色の胎土をもつもので、外区には沈線と絞杉文の内側に锯齒文、山形文を描き、锯齒文内を直線でうずめた文様で、内区部分と推測する破片には、锯齒文の内側に格子文をはさんで内部を縦横に区画し、山形に配された斜線、格子目を直線でうずめた文様等が描かれたものと思われる。この盾は側縁が内彎し両下縁で再び張り出す器形となる。他の一つは上縁が山形で側縁が大きく内彎するもので、外縁に沿った平行線文と内部に直線文を認める。先のものよりやや時期が下ると思われる。

韁には、複雑な器形を呈する飾り板と想定するものがあり、表面に弧線文が描かれている。また、韁本体の箱状部分かと思われるものもある。その他短甲では草摺、馬形では馬具の革縫交差部分が推定できた。

以上の形象埴輪は灰色～赤色のいわゆる埴輪質で、円筒埴輪が比較的小形のものしか出土していないのに対して、家形埴輪のように当時としては大型古墳出土例に寸法では匹敵するようなものもあることが注意される。

3. 墓輪と同じ整地層内でI型式の須恵器が少量ながら出土している。杯は浅く丸みをもった体部に内傾したのち立ったちあがりが付くもので、器形や割りの範囲、内底面のナデなどから陶邑<sup>②</sup> I型式第3段階新相か第4段階の古相と考えられる。他の無蓋高杯、器合、甌は、いずれも杯よりも古く、高杯と锯齒文をもつ器合は陶邑I型式第1段階、波状文をもつ器合と甌も第I段階ないしは第II段階に位置づけられる。これらの須恵器は、埴輪の年代に伴うものかどうか決め手がない。古式の須恵器が埴輪と共に出土した野中<sup>③</sup>、堂山<sup>④</sup>、ウワナベ<sup>⑤</sup>等の古墳では、本遺跡の円筒埴輪よりも大形の埴輪が出土しており、堂山では有黒斑、野中では円筒の口縁が短く外反し、ウワナベでは口縁部にタガがめぐる等の特徴を有している。従って、円筒埴輪の比較からは本遺跡の方が後出的なものと考えられるが、乾燥段階を有するI類の円筒埴輪や大形の家形埴輪は、須恵器のI型式の前半段階まで遡ることも考えられる。また、連続成形法によるII類の円筒埴輪が、先の古墳出土の大形のものと須恵器の型式においてどれ程の開きがあるかについても判断し難いが、少なくとも杯はa類のタガをもつ一部とは併行関係をもつものと推察しておきたい。なお、整地層内ではI型式第5段階ないしはII型式第1段階の杯片が他にあるが、それ以後で埴輪に併行する時期の土器は含まれていない。

4. 整地層上の遺構面では掘立柱の建物群、井戸を検出し、整地層が削平を受けた部分でも井戸と焼土壙を検出した。これらの建物群は、試掘調査の際に敷地南部に設定したトレーンチでも柱穴を確認していることから、かなりの範囲にひろがる集落跡と考えられる。

検出された柱穴より建物を復原すると、遺構面が残る約200m<sup>2</sup>の部分には最底5棟以上の掘立柱建物が存在したことがわかる。これらの建物は、全容は明らかではないが、柱列の並ぶ方向からは一辺がN-15°-E前後を指すSB01、02、03、04と、N-25°-Eを指すSB05とに大別される、このうち前者では、SB01、02、04の3棟が庭を囲ってコの字形に配されて一つの単位をなしているように思われ、これらに井戸SE01が伴ない、井戸の廻絶後に建て替えによってSB03が出現したとみられる。建て替え後の住居単位については調査範囲が限られているためSB03以外不明である。一方、後者は主軸が東へ振っており、柱穴がSE01と切り合っていることから前者の建物より後に建てられたものとみられる。このSB05は、1室住居の他と異って倉庫あるいは2室住居とみられる。同様な方位をとる柱列は、他にSB01と02と重複して東西方向に2間分が認められており、複数棟による住居単位を構成するものと思われる。SE02はこれらに伴う井戸かと推測される。

これらの建物の時期は、先に歴史時代の遺物の面から検討したように、整地層の形成が8世紀末ないしは9世紀初めであり、遺構のなかで年代のわかる井戸SE01とSE02が9世紀前半と10世紀代に考えられることから、集落の上限は8世紀末ないしは9世紀初めに、下限を10世紀末の約200年間におくことができる。平安時代の集落は、最近の研究によると、1棟から3棟、なかには数棟の不均等な住居単位から構成され、耕地拡大をはかる農業經營のもとで結合の弱い単位集団が分解していく時期と考えられており、<sup>①</sup>黒色土器から瓦器への移行の時期である10世紀後半から11世紀前半がさらに大きな変革期となるとも考えられている。<sup>②</sup>本遺跡で検出した掘立柱建物は、中世集落出現前の古代集落の一例となるものである。

以上のように、今回の調査地では、弥生時代の下層遺跡は検出されなかったものの、広い範囲で古墳時代の埴輪を検出し、また奈良時代の整地層と平安時代を中心とする遺構を検出した。このうち埴輪は、原位置を動いているものが大半で、使用状況が明らかではないが、その量が多いことや調査地西部で済されたように密集する完形の円筒埴輪等からみて付近に古墳が存在した可能性も強く意識されるべきものである。付近の巨摩庵寺下層や岩田等の遺跡で検出された埴輪片とともに今後に課する問題として残っている。<sup>③</sup>また、歴史時代の集落は、学校建設予定地の敷地全体(約10,000m<sup>2</sup>)にひろがるもので、旧楠根川を隔てた東側の瓜生堂の奈良時代集落とは別のものと推定され、周辺での調査によって今後古代集落の景観が明らかになっていくものと期待される。

#### 注

- ① 黒崎直「平城宮の井戸」月刊文化財151 1975  
② 東大阪市立郡土博物館において、弥生土器に使用される生陶西麓の粘土を使用して、連続成形法による円筒埴輪の製作と底部の垂み具合を実験した過程において注意された。なお、器高45cm程度の円筒埴輪の製作は、腰の強い粘土を使用したことと、基部の器厚を本遺跡出土5のように分厚くしたため底部の垂みはほとんど生じなかった。  
③ 杯、皿、碗等の食器類に認められ調整は、奈良国立文化財研究所による平城宮跡出土土器の分類に従う。「平城宮発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所 1962  
④ 「平城宮発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所 1975  
S D650Aは、溝SD650を下層と上層の土器に時期差が認められることから下層をA、上層の一部をBとしたもので、9世紀前半に比定している。(Bは9世紀後半)

最近では、S D650A様式の土器は9世紀中葉に近い時期に年代がより限定されている。(後掲④)

- ⑤ 「平城宮発掘調査報告VI」奈良国立文化財研究所 1976  
8世紀初頭～平城上皇期までを7段階に分けて平城宮I～Ⅶとする編年による。
- ⑥ 長岡京 S D51、S D21等出土遺物による。  
「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」京都府教育委員会 1976  
「長岡京跡発掘調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第2冊、財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1978
- ⑦ 川西宏幸「円筒埴輪船論」考古学雑誌 第64巻2号 1979  
円筒埴輪を5期に編年するもので、第IV期は外面の2次調整がヨコハケで無黒斑のもの。第V期とは焼成法の違いにより区別する。
- ⑧ 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ 1966
- ⑨ 「長原」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書 財團法人大阪文化財センター 1979
- ⑩ 「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯」大阪府 1933
- ⑪ 中村 浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」陶邑直所収 大阪府教育委員会 1978
- ⑫ 北野耕平「河内野中古墳の研究」1976
- ⑬ 「堂山古墳群発掘調査概要」大阪府教育委員会 1972
- ⑭ 「平城宮発掘調査報告VI」所収 奈良国立文化財研究所 1975
- ⑮ 小笠原好章「畿内および周辺地域における据立柱建物集落の展開」考古学研究第25巻4号 1979
- ⑯ 原口正三「古代・中世の聚落」考古学研究第23巻4号 1977
- ⑰ 最近、近畿自動車道予定地で行なわれた瓜生堂遺跡の発掘調査において方形埴の痕跡とみられる遺構が検出されいいてある。「瓜生堂遺跡現地説明会資料IV」財團法人大阪文化財センター1979

# 皿 池 遺 跡

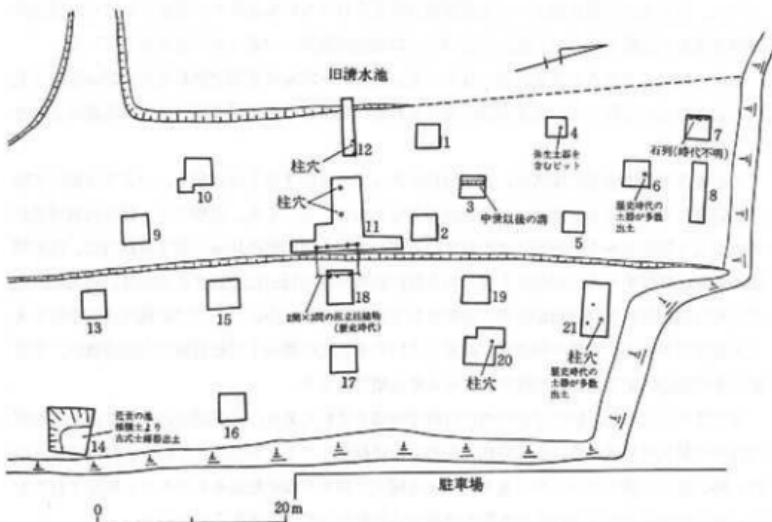
## I 調査に至る経過

### 調査の要旨

皿池遺跡は、現在緑手北中学校の敷地となっている五条皿池より弥生時代後期の土器が出土したことにより周知されている遺跡である。また、遺跡は河内郡の有力氏族の氏寺と考えられる河内寺跡にも隣接しており、昭和47年に皿池の東側で試掘調査を行なった際には和同開珎と奈良時代の土器が出土している。

その後昭和51年に、緑手北小学校の分離校を皿池の北東約9400m<sup>2</sup>の範囲に建設する計画が具体化し、2月と6月の2回にわたりて東大阪市遺跡保護調査会の担当で予定地の試掘調査が実施された。その結果、No.11トレンチとNo.18トレンチとにまたがって奈良時代の孤立柱建物跡を1棟検出し、その他多数の柱穴状ピットや中世の溝等の遺構と多量の古墳時代後期～平安時代の土器、少量の弥生時代後期の土器を検出した。

これらの調査結果を受けて、東大阪市教育委員会では予定地全域が弥生時代から中世に至る遺跡内にあると判断し、その後の対策について協議を行なった結果、(1)校舎建設によって破壊される予定地については全面調査を行なう、(2)棚田状の地形を運動場などの水平な面に変更する場合は盛土によって行なう、として発掘調査を東大阪市遺跡保護調査会に委託することになった。しかしながら、出土遺物の整理や報告書作成のための予算の確保が調査委託費内ではかかられなかったことから、再度の協議を行なった結果、市教育委員会と遺跡保護調査会との間で覚書を交換し、出土遺物の整理等については年度内に市教育委員会が責任をもって行なうこと



第1図 試掘調査地点位置図

として発掘調査を開始するに至った。

## II 位 置 と 環 境

皿池遺跡は、東大阪市河内町一帯にひろがる弥生後期～歴史時代の遺跡である。遺跡は、生駒山地西麓の急傾斜面が緩勾配に移る標高20～30mの扇状地上にあり、北側は山地より流れ出る小谷に接し、南側は隣接する河内寺跡の南を流れる藤木谷川までの比較的高燥な位置にある。この扇状地は西へ800m程下ると標高5m前後の河内平野に移行しており、移行部にあたる東高野街道から外環状線にかけては急傾斜部があつて地形上の境界をなしている。これより西は、扇状地末端部特有の地下水位の高い低湿地となり、付近の小河川や平野部を南から北に流れる恩智川は、土砂の堆積によって天井川の様相を呈している。

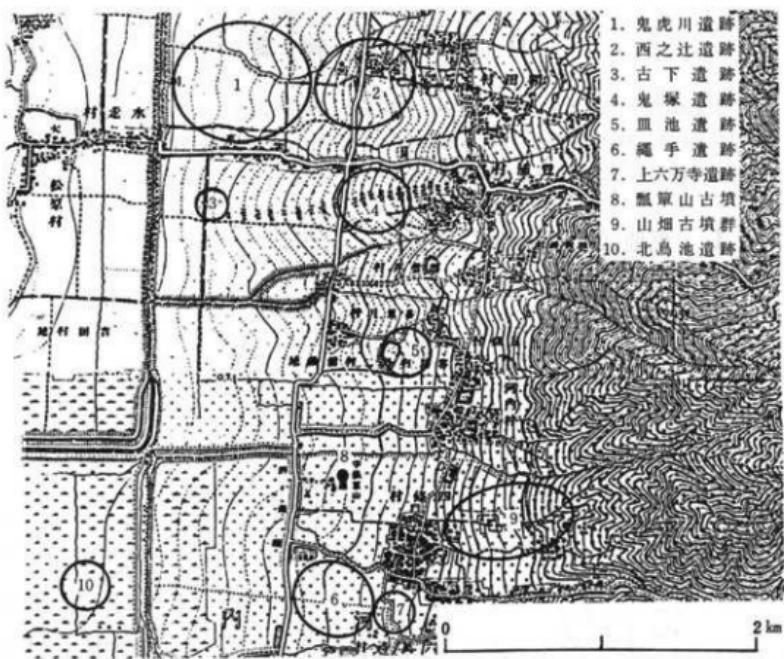
このような小扇状地がいくつも集まつた山麓は、有史以来、狩猟から農耕への生活基盤の変化にも適応した生活環境を有する地域であった。そのため、近畿地方では数少ない縄文時代の大規模遺跡である縄手、馬場川、日下等の各遺跡をはじめ、縄文～弥生移行期の鬼塚遺跡、そして弥生中期に農耕を中心として扇状地末端～平野部に集落をもつた鬼虎川遺跡や同じ頃に農耕適地から離れて山腹に集落を構えた山畠遺跡などの集落跡が点在する。さらに次の弥生後期には以前にもまして遺跡の数や規模も増加し、北から南へ芝ヶ丘、西之辻、鬼塚、縄手、上六万寺、馬場川等の遺跡がいずれも扇状地上にみられるようになる。この扇状地の遺跡増加は、中期末に平野部の鬼虎川遺跡が衰退し、その後から扇状地上の西之辻遺跡が拡大化する例のように、平野部から扇状地上への集落移動が考えられるものもあるが、背景としては扇状地の開発を含めた農耕生産力の発展にもとづく人口増加が進みつつあったことを示している。

皿池遺跡は、これらの後期遺跡のなかでも、標高26～27mの鬼塚遺跡E地点や25m前後の上六万寺遺跡などと同じく、後期中葉以後にそれ迄の集落よりも標高の高い位置に集落の立地をみる例である。

このような弥生後期の集落は、古墳時代に入つても継続するものが多く、一方では新たに後期末以後に平野部でも北鳥池、池島遺跡があらわれている。また、古墳では、鱗付円筒埴輪の特徴から4世紀末～5世紀初頭に比定される猪の木塚古墳が標高16mの縄手遺跡内に、盾形埴輪から5世紀後半～6世紀初頭と思われる塚山古墳が標高12mに位置するほかは、扇尖部以上や山地の尾根筋に後期古墳が数多く造営されている。そのなかには、古式の横穴式石室墳である6世紀前半の芝山古墳や80基程が群集していた6世紀中葉～7世紀初頭の山畠古墳群、7世紀前半の築造による墓尾古墳群やイノラムキ古墳等がある。

歴史時代になると、皿池遺跡の南に河内寺が建立されており、発掘調査によって出土した高句麗系の軒瓦の形式から、飛鳥時代後期初めには存在したことが判明している。河内寺は、中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ四天王寺様式に類する伽藍配置をもつものと推定されており、また寺の周辺には河内郡の郡衙も存在する可能性があると考えられている。

歴史時代の皿池遺跡は、この郡衙想定の有力な候補地とも考えられているのである。



第2図 周辺の遺跡

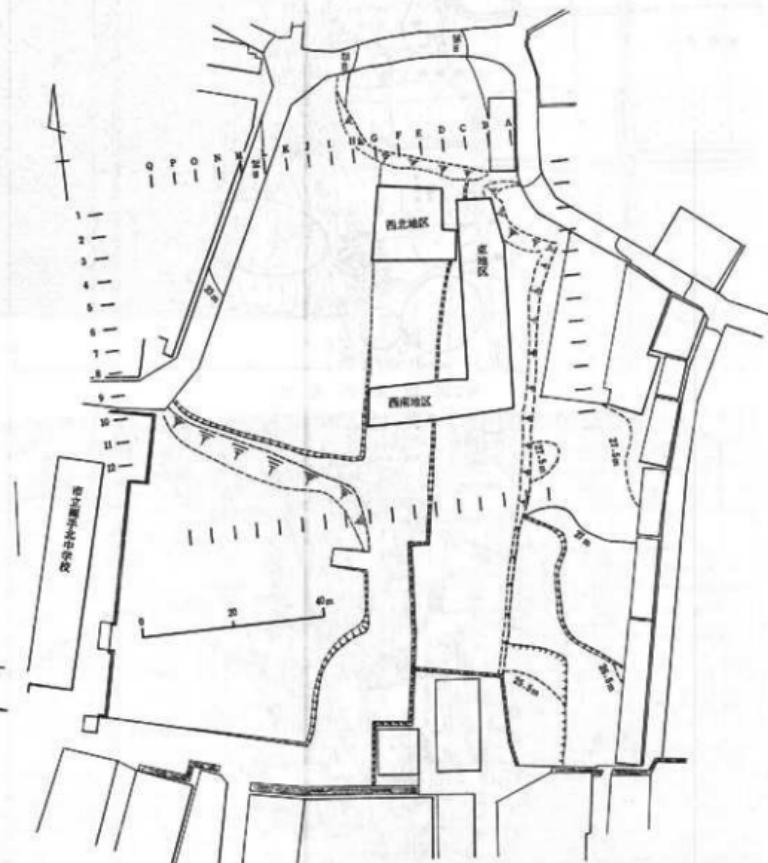


第3図 調査対象地位位置図 1:10,000

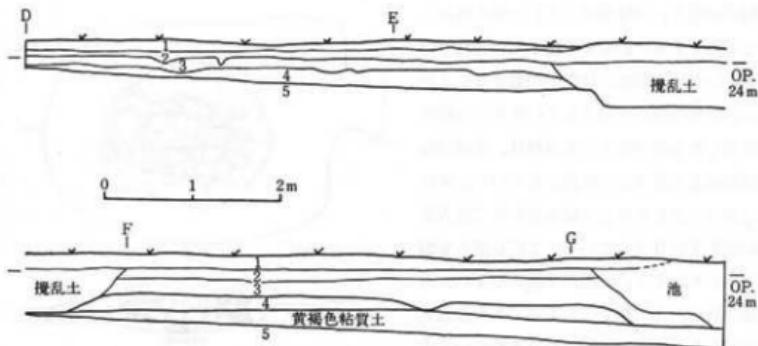
### III 調査の概要

発掘調査は、昭和51年9月24日から延50日間にわたって実施したものである。調査地区は、東大阪市河内町349~351番地の2段の棚田に「コ」の字形に設定し、上段の部分を東地区、下段北側の部分を西北地区、下段南側の部分を西南地区と仮称して作業を開始した。

#### 1. 東地区、西南地区



第4図 調査地区平面図



第5図 西北地区南壁土層断面図

**層序** 地表面より盛土、第1層耕土、第2層褐色土(床土)、第3層灰褐色土、第4層暗褐色土、第5層黒褐色粘質土とつづいている。これらの各層のうち、第5層は無遺物層で、この層の上面にて部分的な範囲ではあるが柱穴を検出した。遺構面を覆う第4層は、黄褐色土のブロックを含む客土層で、なかに飛鳥時代～平安時代の土器を含んでいた。第3層は、黄褐色土、黒褐色土のブロックを含む客土層で、瓦器も混えている。この層は、棚田の造成のために下層を削った土を標高の低い側へ盛土したものと思われる。

以上の基本的な層序の他に、東地区の北端では、地山である第5層が北側へ谷状に下降しており、この落ち込み内には飛鳥～平安時代の土器を含む淡褐色砂質土が約50cm堆積し、より下層には弥生後期～古墳時代前期の土器を含む淡褐色粘質土が堆積していた。

これらのことから、東地区と西南地区の土層は、第5層上面が遺構面となっていた飛鳥～平安時代の段階から平安時代以後に最低2度の整地が行なわれ、そのうち瓦器塊を含む第3層形成時の整地によって現在のような棚田状の耕地となったことがうかがえる。また、東地区北端の谷状の落ち込みは、古墳時代前期以降に埋積が進み、平安時代には淡褐色砂質土の堆積によって他の部分とほぼ同じ平坦地となり、その上に第4層が客土されて同様な経過をたどったものと思われる。

**遺構** 両地区的第5層上面で、直径20～40cmのピットが約30個検出された。また、西南地区的西端部で一辺1m、深さ50cmの方形の土壙と、合口土器棺を小石室で囲んだ土器棺墓を1基検出した。

ピットは、なかに土師器、須恵器の細片を含む黄褐色土が詰っており、一部には平坦面をもつ石が底に据えられた状況がみられることから、掘立柱による建物が存在したものと思われる。しかしながら、これらのピットを検出した範囲は、両地区とも後世の削平をまぬがれた西側半分に限られているために、建物規模については不明である。

土器棺墓は、合口にした土器棺を小石室で囲み、さらにこれらを盛土で覆った埋葬施設である。土器棺には、一方に長胴形の甕の口縁部直下に鍔を貼り付けた羽釜が用いられ、片方には

胸部が短く、口縁部が「く」の字に外折して端部で上方に肥厚する甕が用いられている。いずれも胸部分には撲が付着することから、日常生活に使用されていたものを棺に転用したものである。土器棺は、主軸がほぼ南北を指すように置かれていて、まわりにはこぶし大の石を組み合わせて長方形の区画を作り出している。この石組みを掘り下がったところ、側石が2段に積まれ、内壁の面を描えて構築した石室であることを確認した。さらに、棺に使用されている土器をとり上げたところ、棺の下にも棺台状の置石が認められた。また、石室を構築するための掘形は、石室内の床面となる黄褐色砂質土を追って外側へひろげた結果、浅い皿状を呈する墓壇を検出した。このような状況からみて、土器棺墓はまず皿状を呈する墓壇を掘り、下段の石組みと棺台となる置石を据え、石組みを盛土で固めながら上段の石組みをのせて石室を構築するとともに、内部主体である合口棺を据え、再度の盛土によってこれらを覆ったものと思われる。

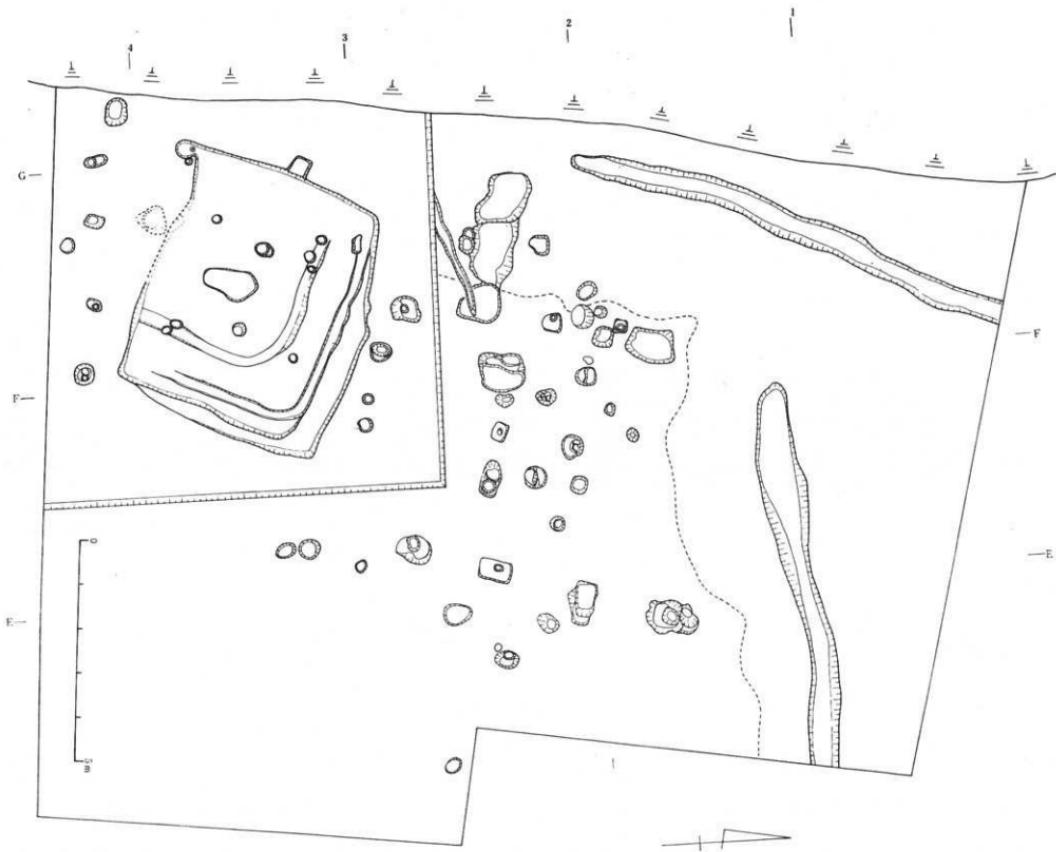
ところで、墓壇が掘られた面は、黄褐色ないし暗黄褐色の砂質土であり、遺構面となる第5層とは異なっている。これは、第5層が西端部で落ち込み、これが黄褐色砂質土によって埋った上に土器棺墓が構築されているためである。この落ち込み内には、須恵器片や炭化物を含んでおり、また落ち込み上面には直径40cmと20cmの円形ピットが検出された。落ち込みが埋った時期は、出土した須恵器片から6世紀中葉以後と考えられる。

## 2. 西北地区

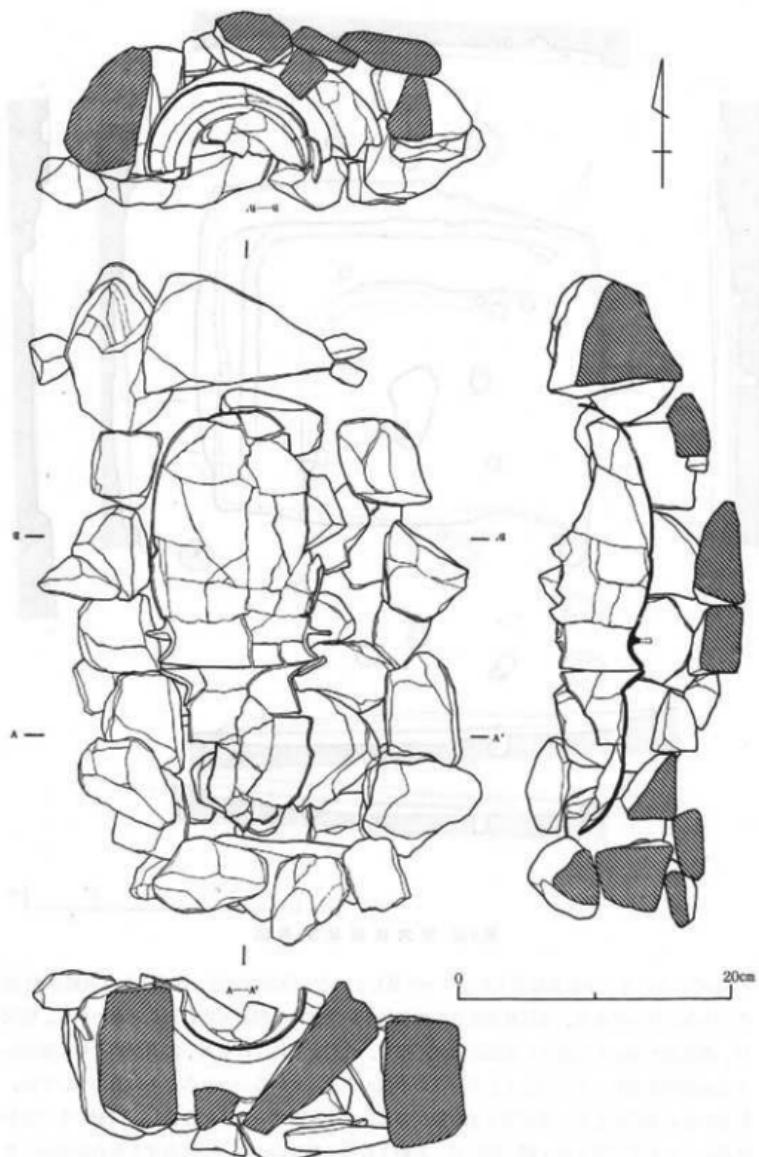
**層序** 地表から第1層耕土、第2層褐色土、第3層灰褐色土、第4層暗褐色土とつづく基本的な層序は他の地区と変わらないが、第3層は他地区と違って黄褐色ブロックを含まない暗褐色土で、地区的西南部分で第4層と第5層の間に黄褐色粘質土が入る点で違いがある。この黄褐色粘質土は、弥生後期の堅穴住居址の埋土となっているもので、本来第5層の下に認める黄褐色の地山と同質である。他の地区で第4層中にブロックで存在した黄褐色土も、より標高の高い地点に存在した黄褐色粘質土を搔き取って整地したために暗褐色土や灰褐色土内に混在したものとして解釈できる。

**遺構** 西北地区では、弥生後期の堅穴住居址、飛鳥～平安時代のピット、土壙、平安時代末を下限とする落ち込み、中世の溝等が層位と切り合い関係によって区別できる。

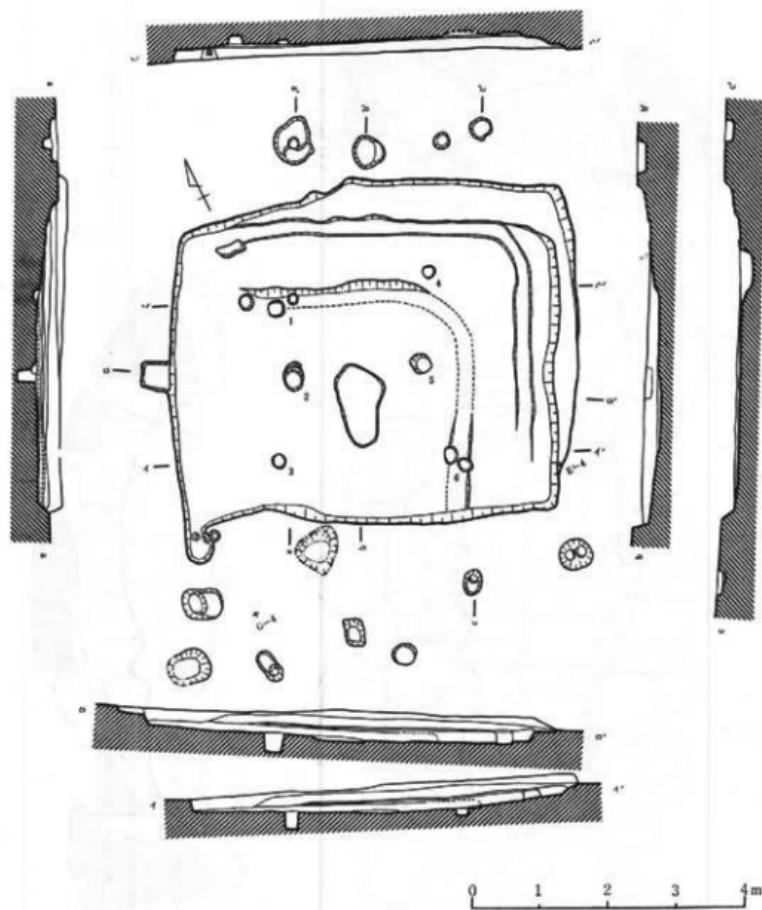
堅穴住居址は、東から西に向って下降するゆるやかな傾斜地に作られた、長辺5.5m、短辺



第7図 西北地区遺構平面実測図



第8図 土器棺窯主体部実測図



第9図 壺穴住居址実測図

4.5mをはかるやや不整形な長方形プランを呈している。壺穴内には、埋土として黄褐色粘質土が全体に入っており、住居址廃絶後の比較的短い期間内に埋め戻されたことがわかる。壺穴は、深さ20~30cmをはかり、床面はほぼ平坦で、北辺と東辺には壁面下に溝がめぐり、壁面から1m程中央寄りにも平行したもう一条の小溝がめぐらっている。これら2条の溝については、外側のものが床面と北・西に張り出た棚状の部分とを区画するように存在し、内側のものは炉を中心とした平坦面と北・西の壁に沿った幅1m程の帯状の場所とを区画するためのものと考えられる。この帯状の部分は、本壺穴の場合やや傾斜面となっていて、一段高くなつたいわゆ

るベット状造構と区別されるが、床面を分割して炉を囲む場所とは別途の意味をもつところである点では共通する点もある。床面には、上層より掘り込まれたものを除いて10個の柱穴状ピットが存在し、このうち主柱穴と考えられるものは6個で、4隅のものが4辺にわたした桁を支えたと考えられる。中央部の2個については、棟木を直接支えたものかもしれない。軸跡は、中央部よりやや南で長軸1m×短軸0.6m、深さ5cmの焼土がぎっしり詰ったものを見めた。このほか、竪穴外では、西辺中央部に接して一段下った部分があり、竪穴住居の入口と考えられる。また、北側4個、南側7個のピットは住居址に関係するものと思われるが、不揃いである。

竪穴住居址の年代は、後で述べる出土遺物の年代観から弥生後期中葉～後葉と考えられる。

一方、歴史時代の造構は、竪穴の埋土上面と、第5層上面においてピット、土壙を検出した。造構には、柱の根石を有する円形の柱穴、掘形が長方形の柱穴、その他不整形のピット、土壙があり、いずれも暗灰褐色土が入っていた。造構の年代は、ピット内出土の土器に奈良時代的な土師器や黒色土器塊（内黒）があることやピット群の一部の上にかぶさって堆積する炭化物混り暗褐色土内に黑色土器（内黒）が含まれることなどから、下限が平安時代にあると思われる。上限については、包含層内の土器は奈良時代のものまでであるが、西南地区の土器棺墓が飛鳥時代に層することから、この時期のものまでを含んでいる可能性がある。これらのピットには、柱列と考えられるものもあるが、建物の復原はできなかった。

一方、ピット群の一部にかぶさった恰好で、地区の北側半分に堆積する炭化物混り暗褐色土は、先述したように奈良時代的なものから平安時代の黒色土器（内黒）までを含むもので、これは自然地形が北側の谷筋に向って下降している部分に、隣接する建物群からの廃棄物を含む土が堆積していったものと考えられる。

これらの他の造構としては、溝が3条検出されている。溝1は、幅50～90cm、深さ30～50cmをはかり、なかには砂礫が入っていた。この溝は、東から西に流れるものであるが、溝2に至るまでに途中で消滅している。溝2は、北北東から南南西に向って流れる幅40～60cm、深さ10～20cmをはかるもので、溝内には砂が堆積し、上面には小礫が密集していた。溝3は、東から西に流れる幅15～30cm、深さ10～20cmをはかるもので、これも上層に小礫が詰っていた。このような礫を敷いた溝は、排水施設として使用されたものと思われる。溝の時期は、炭化物混りの暗褐色土の上面に作られていることから鎌倉時代以後と考えられる。用途については明らかではないが、時期的にみて集落はすでにこの付近から消えていると思われることから、畠地の排水溝等の目的が考えられる。



試掘りトレンチ掘立柱建物跡

## IV 出土遺物

### 1. 弥生時代後期の土器

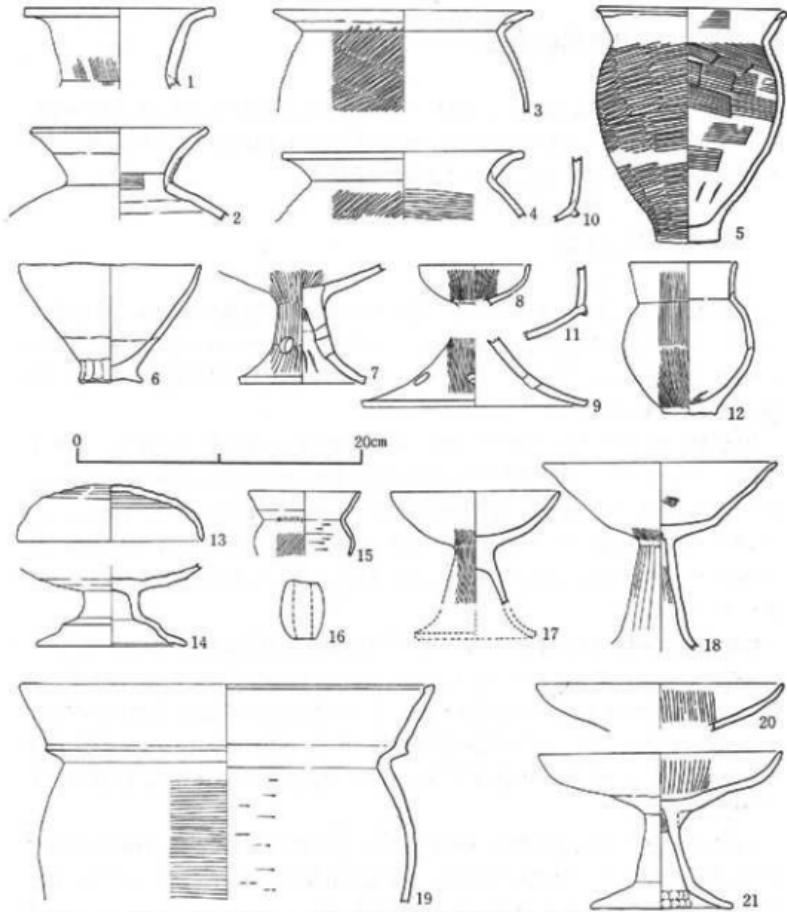
西北地区の竪穴住居址内からは、1～12の弥生土器が出土した。このうち1、3、4は竪穴西南隅のピット内から出土したものである。壺1は直立ぎみの頭部に外反する口縁部をもち、端部はそのまま面でおわっており、頭部外面にタテハケがみえる。壺3、4は「く」の字に外反する口縁部をもち、3は口縁中途の接合部までは頭部上縁を折り返し、なで肩の脇部は外面タタキ（3条/cm）、内面タテ方向のヘラ搔きにより調整する。4は口縁部を貼り付け、肩の張った脇部は外面タタキ（2.5条/cm）、内面ヨコハケ（5本/cm）により調整する。

2. S～12は住居址の埋土となっている黄褐色粘質土より出土したものである。壺5は純く外折する口縁部を頭部から折り返し、なで肩の脇部を外面タタキ（2.5条/cm）、内面ヨコハケ（5本/cm）により仕上げる。脇下半のタタキメが消えている部分は接合部。外面にスス、内面にこげつきが認められる。壺2、12のうち小形の短頸壺12は、平坦な底部と球形の頭部に直立する短い口頭部が付き、外面全体をタテハケ（7本/cm）する。内面は底部以外ユビナデ。広口壺2は、ラッパ状に外反する口頭部をもつもので、口縁部と頭部は接合部によって区別できる。頭部内面にヨコハケが認められるほかはナデ調整で、脇内面には粘土結痕が顕著。鉢6は壺の下半部と共通する逆円錐形で、底部は上げ底にユビで成形し、全体をナデにより仕上げている。手焙形土器10、11は、いずれも腰部の破片で、接合部に刻目凸帯がめぐっている。11は石英粒が顯著な灰白色の胎土をもつ搬入品。高杯7～9では、8が小形の拵状杯部をもつ例で、内面に暗文風の放射状ヘラミガキが行なわれている。7、9は脚部で、9が擴広がりのもので、7が広がりの小さいものである。

以上の弥生土器のうち、住居址西南隅のピットから出土したものは住居址の年代を示す資料である。しかし、少量のこれらの土器には、時期決定の決め手となるような特徴はみられない。わずかに壺1の口縁端部が拡張されないことや、壺3の口縁部途中まで脇部上縁を折り返す手法で作られていることから、弥生後期中葉～後葉に位置づけられる。一方、埋土内出土の土器をみると、ラッパ状の口頭部をもつ壺2や暗文風のヘラミガキを施す高杯杯部8、脚部が大きく広がる脚部9、手焙形土器などの後期後葉～末に出現する特徴がみられる。

### 2. 古墳時代の土器

土器には小型丸底土器、高杯、壺がみられ、須恵器には蓋と高杯がみられる。いずれも量は少ない。小型丸底土器15は、扁球形の体部に内彎ぎみに外傾する口縁部が付く。体部は外面斜めハケ（5本/cm）、内面ヘラ削りで調整し、器厚は2～3mmと薄い。高杯18は、平坦な杯底



第10図 弥生時代の土器・古墳時代の土器・歴史時代の土器(1)実測図 1竪穴西南隅ピット内、2~12竪穴埋土内、15.17.19東地区淡褐色粘質土、13.14試掘16トレンチ第4層、16.20.21西南地区第4層出土

部に大きく外反する口縁部が付くもので、内外とも斜めハケ+ヨコナデにより調整する。17は楕状の杯部に半中実の脚部が付く。甌19は、胸部最大径より口径が大きいもので、2重口縁の端部は内面に肥厚する。脚部は外面ヨコハケ(4本/cm)、内面ヘラ削りで調整する。これらは広義の布留式に属する5世紀前半～中葉のものである。

須恵器は、蓋13が天井部と口縁部の境のないもので、高杯14は脚裾部で2段に屈曲し、裾端部内面にかえりが付くもの。6世紀末～7世紀前半のものである。

### 3. 歴史時代の土器

土師器には杯、塊、皿、蓋、羽釜、甕などの器種がみられ、須恵器には杯、壺、鉢がみられる。このうち、土師器の食器類については、主に西北地区の建物群から廃棄されたと思われる遺物を含む炭化物混り暗褐色土から出土したものである。

#### 土師器、黒色土器

**杯32～34** 平底に外傾する口縁部が付く器形。32は口縁端部を内側に巻き込み、内面に斜方射状暗文を施す。調整は、口縁部をヨコナデし、底部をヘラ削りするb手法による<sup>⑩</sup>。33、34は内彎したのち端部でわずかに外反する口縁をもつ。外面は口縁部以外未調整。33は底部に凹凸が多く残し、口縁上部のみをヨコナデする。

**塊22～31、35** 35は平底に内彎する口縁部が付き、削り調整のc手法の後全体にヘラミガキを行なっている。他は平底ないしは平底に近い丸底をもち、無高台のもの22～26、31と有高台のもの27～30がある。調整は、口縁上部を強くヨコナデし、以下は未調整のe手法による。この塊の特徴は、口縁上部のヨコナデが強いために立ち上がりをみせ、口縁下半及び底部にはユビ成形による凹凸が顕著である。また、器厚の薄いものが多く、胎土には砂粒を含み、雲母も目立っている。

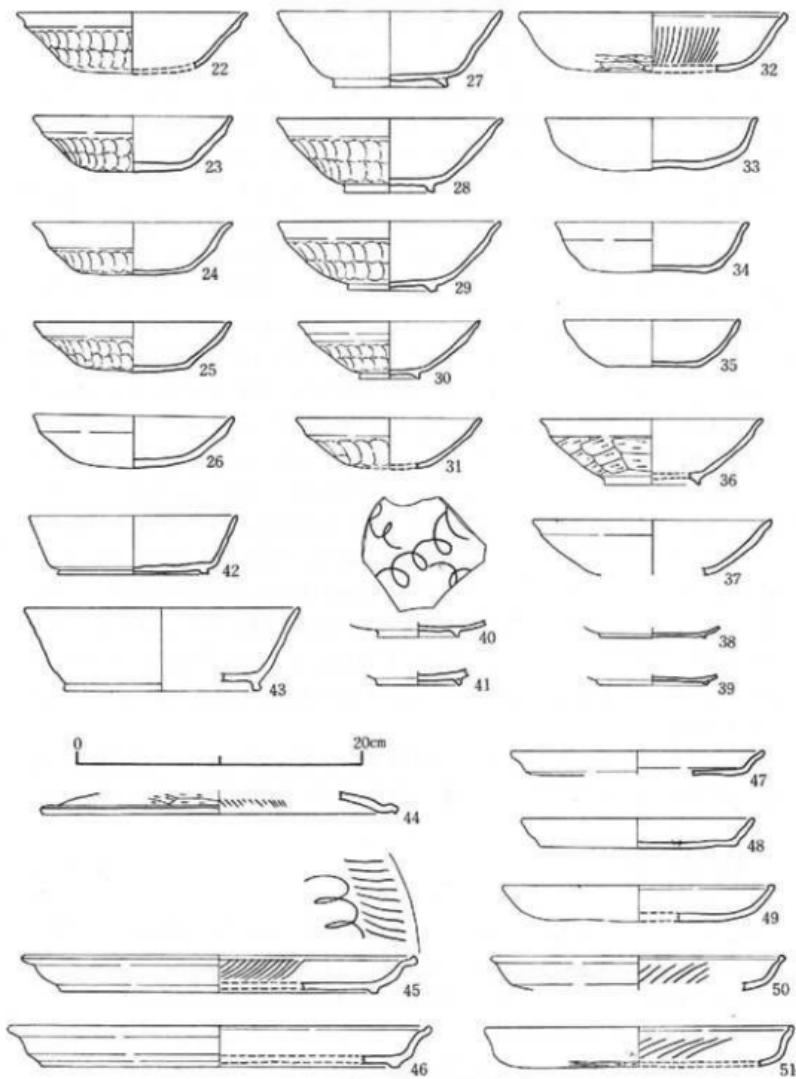
**皿45、46、47～51** 広い平坦な底部に外傾する短い口縁部が付く器形。平底のもの47～51と有高台のもの45、46がある。平底の皿50、51は、内面に斜方射状暗文を施すもので、51が底部のみをヘラ削りするb手法、50は口縁ヨコナデ、底部は未調整のa手法で木葉痕は残っていない。これらに対して、49は口縁部の外傾度がいっそう強く、調整は口縁のヨコナデ以外は未調整である。口径の小さい47、48は、口縁部と底部の境の外面に稜をみると、口縁のヨコナデ以外は未調整である。

有高台の皿は2点あり、口縁端部を内側に巻き込む特徴が顕著である。45は口縁内面に斜方射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施す。a手法で口縁部にヨコヘラミガキを行なう。46は暗文をみずc手法により、その上に全体をヘラミガキする。

**蓋44** 有高台の皿に伴う蓋で、天井部と口縁部の境が強く屈曲し、口縁端部は下方に肥厚する。内面に斜方射状暗文を施す。調整は、天井部全体をヘラ削りする。

**黒色土器36～41** 36、37は土師器塊22～31と同様の器形で、外面灰黄色、内面黒色を呈する。調整は、36がc手法、37がe手法による。c手法の削りはヨコナデの強い口縁上部には及んでいない。他に、いずれも外面灰黄色、内面黒色の高台部分が出土している。なかには38、39のようにきわめて薄手(2～3mm)のものがあり、40の底部内面にはラセン状暗文が施されている。胎土はいずれも精良。36はピット内より出土したものである。

**高杯20、21** 浅い皿状の杯に脚部が付くもので、杯部内面には正方斜状暗文を施す。脚据部



第11図 歴史時代の土器、須恵器実測図(2)

34.35.45西南地区第4層、33試掘22トレンチ第4層、46試掘10トレンチ第4層、他は西北地区炭化物混  
り暗褐色土出土

内面に指頭圧痕をみる。黄褐色を呈し、精良な胎土を使用。

**羽釜52、56～58** いずれも長胴形の羽釜である。58は甌59とともに土器棺に使用されていた。完形に復原されるこの羽釜は、外反する口縁部と尖底ぎみの丸底となる砲弾形の胴部をもち、口縁端部は上方に肥厚し、口縁部と胴部の境の直下に幅3.5cmの水平な鈎がめぐっている。口縁内面はヨコハケ+ヨコナデ、胴部は外面がタテハケ(6本/cm)、内面がユビオサエやナデによって調整する。鈎の貼り付けは胴外面のタテハケ調整の後に行なわれている。全体に器厚が薄く(胴部で3～4mm)、淡茶褐色を呈し、金雲母、角閃石を大量に含む胎土を使用する。

52、56、57は土器棺墓を覆う第4層より出土した。52は口縁部が短く外反し、端部は丸く、鈎は幅3cmの厚手のものがめぐっている。口縁内面のヨコハケと胴部外面のタテハケは、58よりも粗く(3～4本/cm)、器厚もやや厚い。56、57は口径30cm前後の大形の羽釜で、56は外反する口縁部と胴部の境に鈎がめぐり、57はほとんど外反しない口縁部と胴部にまたがって幅3cmの鈎が付く。調整は同様で口縁内面のヨコハケは56が細かく(6本/cm)、57が粗い(3本/cm)。これらの胎土は、金雲母、角閃石を含む同様のもので、淡茶褐色と暗茶褐色を呈する。

**甌53～55、60** 59は土器棺に使用されていたもので、「く」の字に外折する長い口縁部と下ぶくれ球形の胴部を有し、口径が胴部最大径を上廻る甌である。口縁端部につまみあげの上方肥厚をみる特徴もある。調整は、胴部外面をタテハケ(7本/cm)、内面を縱方向にヘラ削りするが、胴内面の上半には4～5cm幅の接合痕も認められる。外面にスス、内面にこげつきが付着する。胎土は灰黄色を呈し、砂粒を含むものである。54も口径が胴部最大径を凌ぐもので、胴外面タテハケ(5本/cm)、内面ヨコハケ(12本/cm)調整。黄褐色を呈し、金雲母を含む胎土を使用する。53は、短く外反する口縁部に長手の胴部が付くもので、口縁内面ヨコハケ、胴部外面タテハケ(5本/cm)、内面ナデによって調整する。淡褐色を呈し、金雲母、角閃石を含む胎土を使用する。

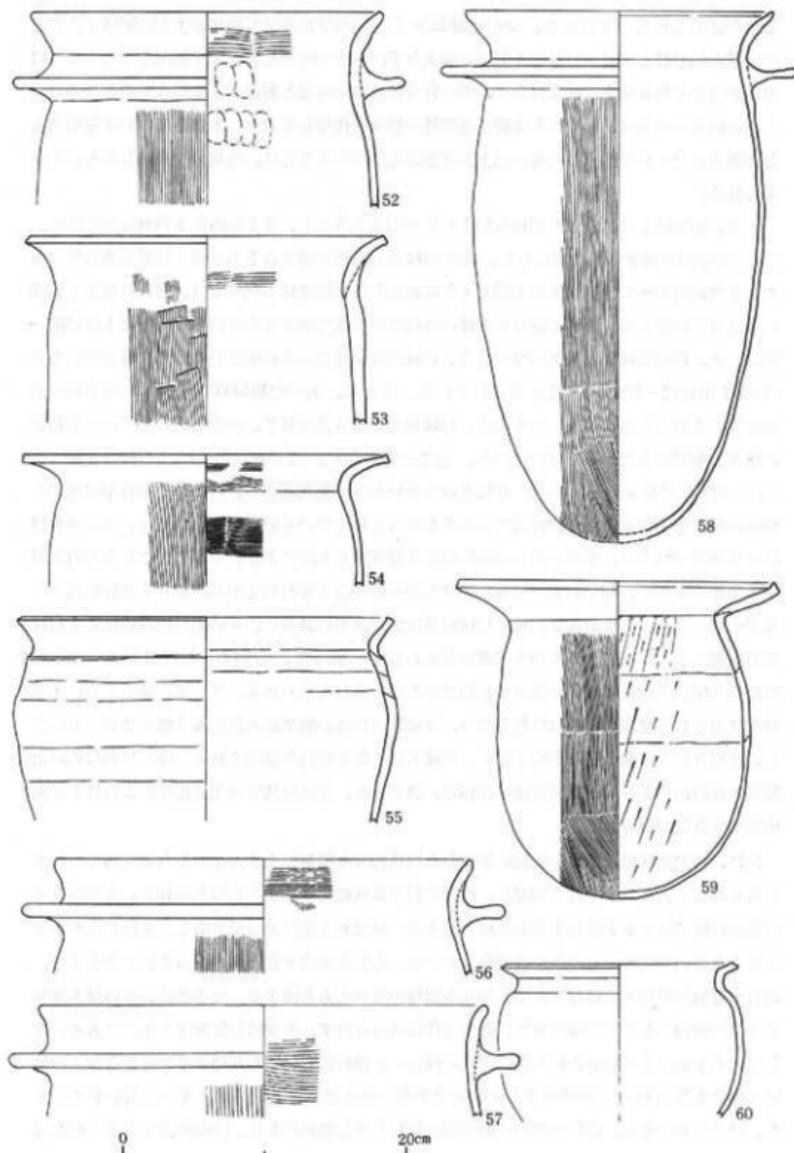
これらに対して、55、60は短く外反する口縁部と胴部の境を強くヨコナデする特徴をもち、胴部外面もユビオサエのみで凹凸や接合痕を残す甌である。赤褐色を呈し、砂粒を含む胎土。

## 須 惠 器

破片は多いが、器形がわかるものは少ない。杯は高台が付くもので、大形の43と小形の42とが出土した。甌は有高台の短頸甌である。鉢は口縁部と体部の境が強い回転ナデによってくびれる灰白色軟質のものである。これら須恵器の年代は土師器の年代観と同様な傾向をもつものと思われる。

以上の土器は、飛鳥時代～平安時代の年代幅をもつ。これを時代順にみると次のようである。

まず羽釜、甌については、55、60が口縁下のくびれと胴外面のユビオサエから平安時代に下ると思われる以外、飛鳥時代～奈良時代に含まれる。このうち、羽釜については土器棺に使用されている58と、第4層出土の52、56、57とでは、口縁部の外反度や鈎の付く位置等において



第12図 歴史時代の土器器実測図(3) 58.59西南地区土器棺、56.57西南地区第4層。52.54試掘22トレンチ第4層、53.60試掘6トレンチ第4層、55西北地区炭化物混り暗褐色土出土

差異が認められる。すなわち、58は口縁部が「く」の字に外反し端部が上方に肥厚することや、鍔の貼り付く位置が口縁部と胴部の境より下にあるのに対して、第4層出土のものには口縁部があまり外反せず、端部は丸く、鍔の付く位置が口縁部と胴部にまたがるものも含んでいる。これらの羽釜は、いずれも生駒山地西麓の胎土を使用しており、本遺跡において造構内と包含層とに分かれて出土したものに上述の型式差を認めることは、時期差を反映したものと考えられる。

一方、他遺跡より出土した同様な胎土をもつ羽釜をみると、まず難波宮下層堅穴出土例は、「く」の字に外反する口縁部をもち、鍔が口縁部と胴部の境より下方に付く特徴がある<sup>⑩</sup>。また、7世紀後半～8世紀前半の土器とともに出土した船橋遺跡の例<sup>⑪</sup>では、鍔は口縁部と胴部の境より下に付くが、胴部の張りや口縁の外反度が難波宮例より小さいもの（船橋I第12図-235）と、鍔が口縁部と胴部の境に付き、口縁の外反度がさらに小さいものや口縁の短いもの（船橋I第12図-233.234）とが含まれている。さらに、長岡京跡SD0731<sup>⑫</sup>において奈良～長岡京期の土器とともに出土したものは、口縁部があまり外反せず、水平方向に短くのびる鍔が口縁部と胴部にまたがって付いている。以上の例からも、この種の羽釜は、口縁部が長く、「く」の字に外反するものから、外反度の小さいものへ漸次変化し、鍔の付く位置が口縁部と胴部の境より下のものから口縁部にかかるものへと移っていく傾向がうかがえる。このうち口縁の外反度の減少は、胴部の張りの減少傾向と関連するものである。そして、これら河内産羽釜の器形の変化は、初期の水平に長くのびたのち端部近くで折れがる鍔が、7世紀に入ると水平の鍔となり、7世紀後半以後に口縁の外反度が次第に減少し、8世紀には鍔の位置も口縁部と胴部にまたがって付くという変遷が考えられる。従って、今回出土した羽釜は、土器棺に使用の58が7世紀にそれ以外は8世紀代のものを含むと思われる。そして、58とともに土器棺に使用された甕59も同様な時期となり、この種の口径が胴部最大径を凌ぐ甕の器形においても、奈良時代には胴の張りがなくなり、口縁も短くなる傾向が認められる。他に飛鳥時代の土器には杯内面に正方射状暗文を施す高杯20、21があり、飛鳥地域での土器編年によれば7世紀中葉の年代観が得られる。

次に、西北地区の造構群の北側に堆積した炭化物混り暗褐色土より出土した食器類について特徴をみると、杯はb手法で調整し、内面に斜方射状暗文を施す奈良時代の杯と、奈良時代末以後の口縁部ヨコナデ以外未調整の杯とがあり、碗はe手法によって調整し、全体にユビオサエによる凹凸が顕著なものが多数出土している。これらには平底と有高台のものとがあるが、高台の有無以外器形は同様であり、黒色土器塊の器形とも共通する。e手法により口縁上部がやや立つ傾向をもつこの種の碗は、奈良時代にはみられず、平安時代に属するものである。そして、c手法により調整された黒色土器（内黒）と器形においても共通することからは、10世紀に黒色土器（両黒）が出現する前段階で内黒の塊とともに用いられたものと思われる。また、胎土においても、砂粒のなかに金雲母の微粒を含む特徴があり、河内地方で生産された可能性もある。

皿は、有高台の45が内面に斜方射状暗文とラセン状暗文を施す奈良時代前半のもので、平

底の皿では、あらい斜方射状暗文を施す50、51が奈良時代中頃に、口縁部の外傾度が大きい<sup>49</sup>が奈良末～平安時代初めに、小形の47、48が奈良末以降と思われる。また、蓋は削り手法と口縁部が屈曲する特徴から奈良時代後半に位置づけられる。

これらのように、西北地区出土の食器類は、杯、皿に暗文が施され、a 手法、b 手法で調整する奈良時代前半代から、e 手法による塊や黒色土器（内黒）の段階までの年代幅を有し、量的には後者に中心をみることができる。

## V ま　と　め

今回の皿池遺跡の調査は、当初 2 つの目的をもっていた。一つは、調査地が河内寺跡<sup>50</sup>の北方約 150m の位置にあたることから、地形等を考慮すると河内郡の郡衙に相当する施設が検出される可能性が考えられたことで、他の 1 つは、これまで土器が採集されただけで遺跡の内容についてはほとんど不明であった弥生後期の皿池遺跡の実態を少しでも明らかにすることであった。

調査の結果、前者については、試掘調査の際に掘立柱建物跡を 1 棟検出し、本調査でも建物を構成する多数の柱穴を検出したことにより、調査地一帯が集落跡に含まれることを確認したが、調査前に想定された河内郡郡衙に相当する明確な建物群は検出されなかった。この集落の範囲は、調査地北端に古い谷筋が存在することから北限が認められ、河内寺跡の南側にも谷筋があって河内郡条里の四条と五条の条境となる<sup>51</sup>こと、さらに今回の調査地と河内寺を結ぶ線より東は急傾斜の扇状地となっていること等から、掘立柱建物によって構成される集落の広がりは河内寺の北方から西方にかけてと推定される。建物群の時期については、西北地区的比較的良好な遺物包含層内の土器の年代から、平安時代の 9 ～ 10 世紀を中心として上限を奈良時代前半に、下限を平安時代後半におくことができる。また、西南地区で検出された土器棺墓の年代から、建物群の上限が飛鳥時代まで遡る可能性もあり、隣接する河内寺の存続年代とほぼ一致する時間が考えられる。

土器棺墓は、羽釜と甕を合口にした主体部をもち、まわりを小石室で囲んだ上に盛土をかぶせる構造で、生駒西龍の胎土を使用した羽釜を合口棺の一方に用いている。このような羽釜を土器棺に用いた例は、大阪府河南町東山遺跡<sup>52</sup>で土壤内に合口の羽釜を置いたものが検出されており、他地域にみられる甕を合口にした土器棺と同様な埋葬施設と思われる<sup>53</sup>。

歴史時代の遺物では、土器棺墓に使用された羽釜のほかに、包含層からも同じ胎土の羽釜が出土したことが注意される。これらを比較すると、口縁の外反度や端部の形状、鈎の貼り付く位置や形状等に違いが認められ、年代差を含むものと考えられた。そして、他遺跡の例から検討を加えると、口縁は外反度の強いものから弱いものへ、鈎の位置は胴部に付くものから口縁部と胴部の境にまたがって付くものへと時代が下るにしたがって変化するものとみられ、実年代は土器棺使用のものが 7 世紀代に、包含層のものには 8 世紀に下るもののが含まれると考えられた。この他では、e 手法による土器塊と c 手法による黒色土器塊（内黒）とが西北地区を

北半の堆積土より比較的まとまって出土したことがあげられる。これらは同じ器形であり、土師器壺は大阪市長原遺跡のNo.26トレンチ土器層出土例<sup>④</sup>に近いものであるが、本遺跡のものは器形においてやや古相を呈し、同様な器形の黒色土器にc手法が認められること等から長原遺跡の土器層の年代よりはやや古い段階のものと考えられる。実年代は、c手法の下限の時期ともほぼ一致し、黒色土器壺（両耳）が伴わない9世紀後半～10世紀前半に幅をもって考えておく。

以上のような平安時代末までの集落は、その後大規模な整地が行なわれて耕地となっている。その時期は、中世～近世との段階が不明であるが、西南地区の第4層と第3層がいずれも客土層であることから最低2度の整地があったものと推測される。

第2に、これまで実態が明らかでなかった弥生時代の皿池遺跡については、西北地区の西南部で長方形プランの堅穴住居址が検出されたことによってその一端を知ることができた。この住居址は、西側に出入口を設け、内部は北壁と東壁に沿った幅1m程の部分と炉を中心とした広い床面とを小溝で区分したもので、この平面分割は住空間の有する機能の違いにもとづくものと考えられた。また、北と東には若干の張り出した部分が一段高くなっている。この棚状の部分も溝で区画されていた。柱の配置は、対角線上の4柱穴とこれらの内部に2本の柱穴がみられたことから、桁を支えるものと棟を支える柱とに分かれていたものと思われる。このような特徴を有する堅穴住居址は、堅穴内のピットと埋土より出土した土器から弥生後期中葉～後葉と考えられ、東大阪市域では中期の山畠、後期の岩流山、古墳時代の馬場等各遺跡の検出例<sup>⑤</sup>に続くもので、また最近では皿池遺跡調査後の昭和53年に鬼塚遺跡E地点で住居の上屋が炭化材となって遺存していた例<sup>⑥</sup>とともに、住居址の構造や生駒山西麓部の集落動向を知るうえで貴重な資料となるものである。

#### 付記

皿池遺跡の調査結果については、発掘終了直後に速報を掲載したことがある（調査会ニュースNo.6、1976）。その内容については、遺物整理の結果を含めて訂正するところも少なくなかったので本報告において補訂するものである。

#### 注

- ① 調整方法の分類は「平城宮発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所 1962による。
- ② 中尾芳治「難波宮造営以前の遺跡調査報告」難波宮址の研究5-2 1965
- ③ 原口正三、「船橋I」平安学園考古学クラブ 1958
- ④ 「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」埋蔵文化財発掘調査概報 1979 所収 京都府教育委員会
- ⑤ 「河内寺跡I・II」東大阪市教育委員会 1973, 74
- ⑥ 桑原公徳、「条里制と小字地名」枚画市史別編所収 1966
- ⑦ 「河南町東山所在遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 1969
- ⑧ 東大阪市域でも奈良時代の合口甕棺が検出された例もある。上野利明「宅地造成に伴う轟尾古墳群隣接地における試掘調査」調査会ニュース11, 12 東大阪市遺跡保護調査会 1979
- ⑨ 「長原」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 財團法人大阪文化財センター 1979
- ⑩ 藤井直正・都出比呂志「原始古代の枚岡I」1967 「岩流山遺跡発掘調査概報」東大阪市教育委員会 1971
- ⑪ 「鬼塚遺跡II」東大阪市教育委員会 1978

# 図 版

図版1 瓜生堂上層遺跡  
遺構



遺構面・遺物包含層遺存部分全景（東より）



遺構全景（東より）

図版2 瓜生堂上層遺跡  
遺構

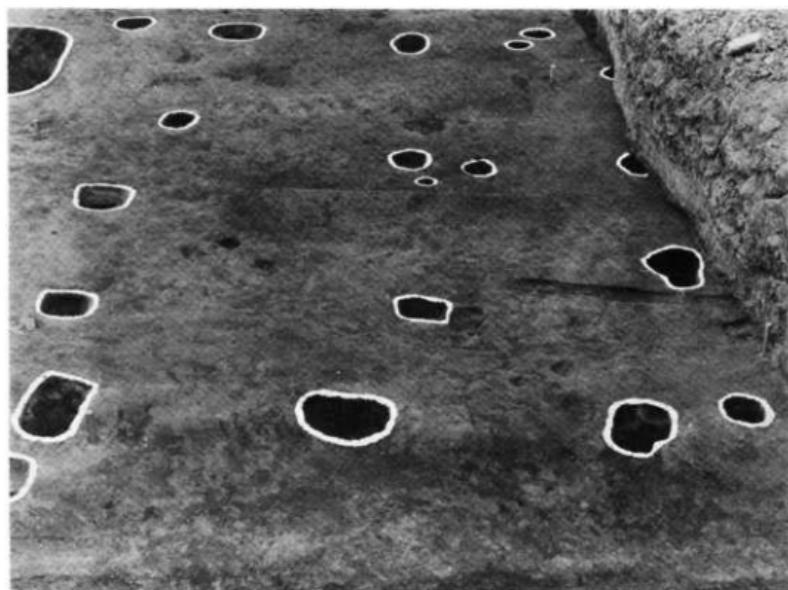


掘立柱建物SB01 SB03~05 井戸SE02 (南より)



掘立柱建物SB01 SB03~05 井戸SE02 (東より)

図版3 瓜生堂上層遺跡  
遺構



振立柱建物 SB02 (東より)



井戸 SE01 (東より)

図版4 瓜生堂上層遺跡 遺構



井戸SE02  
(東より)



第6層上面  
溝(東より)

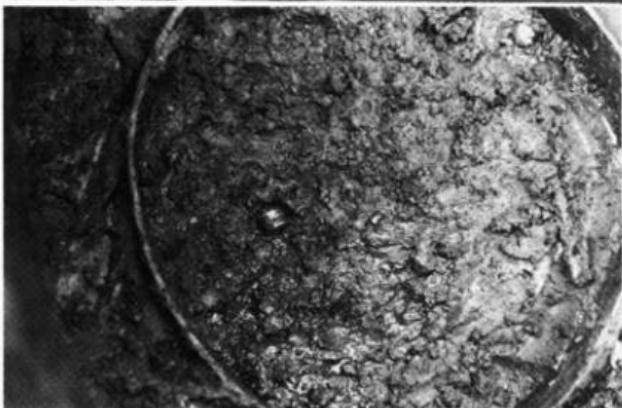


北壁断面

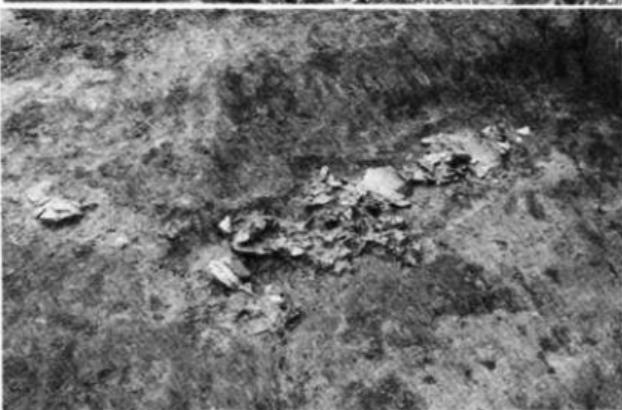
図版 5 瓜生堂上層遺跡 遺構



井戸SE01  
櫛出土状況



井戸SE01  
銅鏡出土状況



第5層上面  
植輪5.31出土  
状況

圖版 6 瓜生堂上層遺跡  
遺物



1



3



5



12

円筒埴輪 1 A I a 類 3.5.12 A II a 類

圖版7 瓜生堂上層遺跡  
遺物



13



21



25



26

円筒埴輪 13 A II a 類 21.25.26 A II b 類



29



23



30



35



32



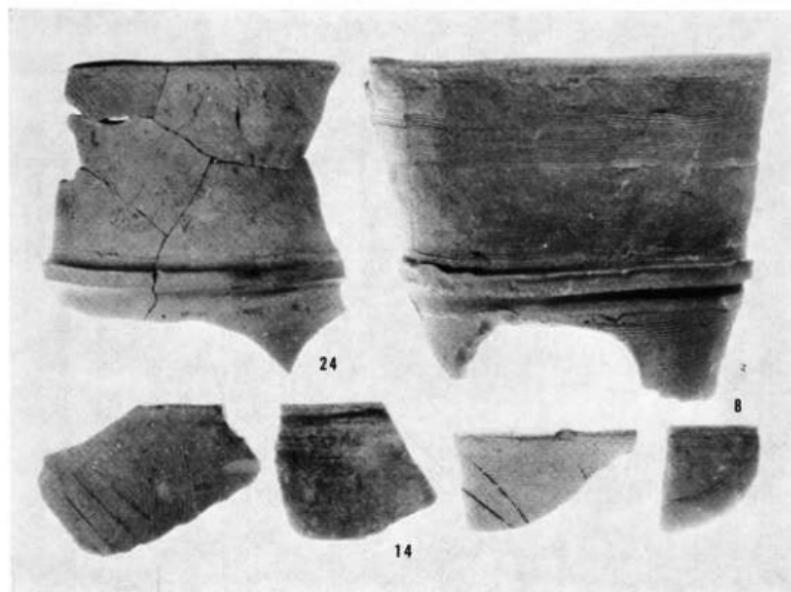
33



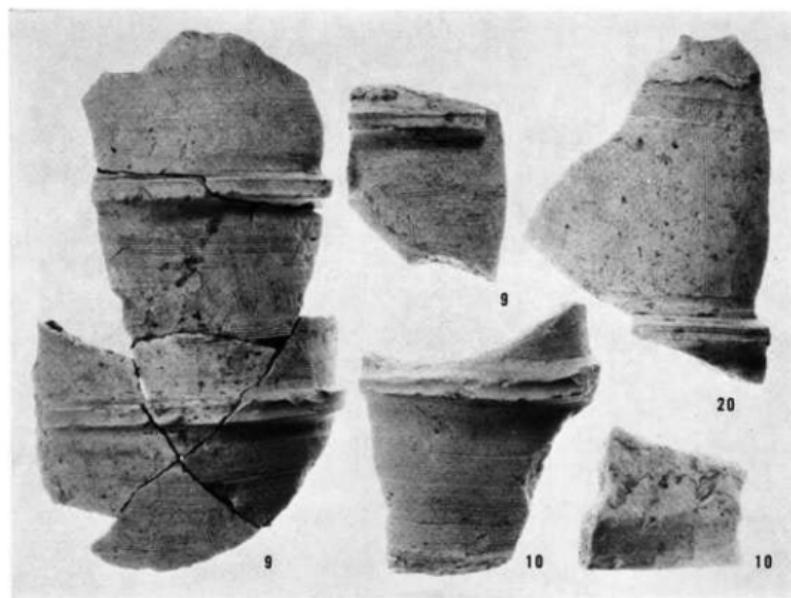
31

円筒埴輪 23 A II a 類 2.9.30 B II b 類 朝顔形円筒埴輪 31.32.33.35

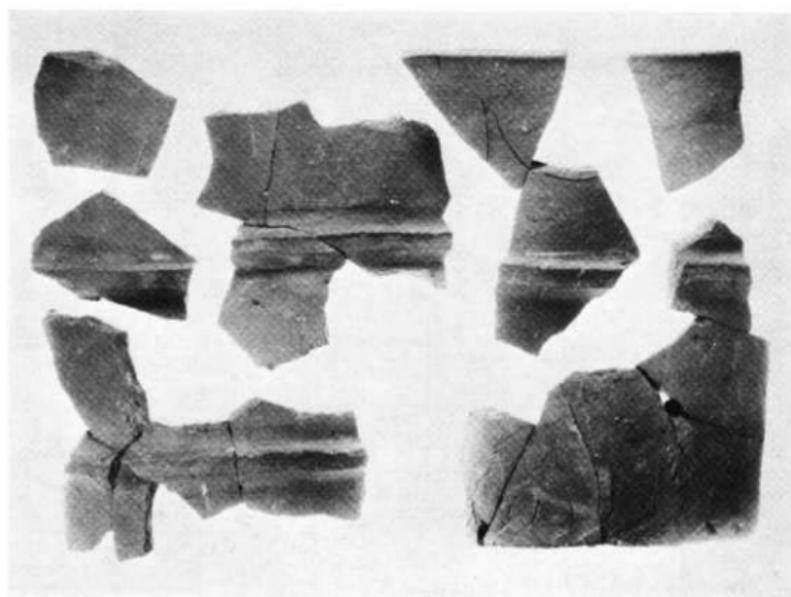
図版 9 瓜生堂上層遺跡  
遺物



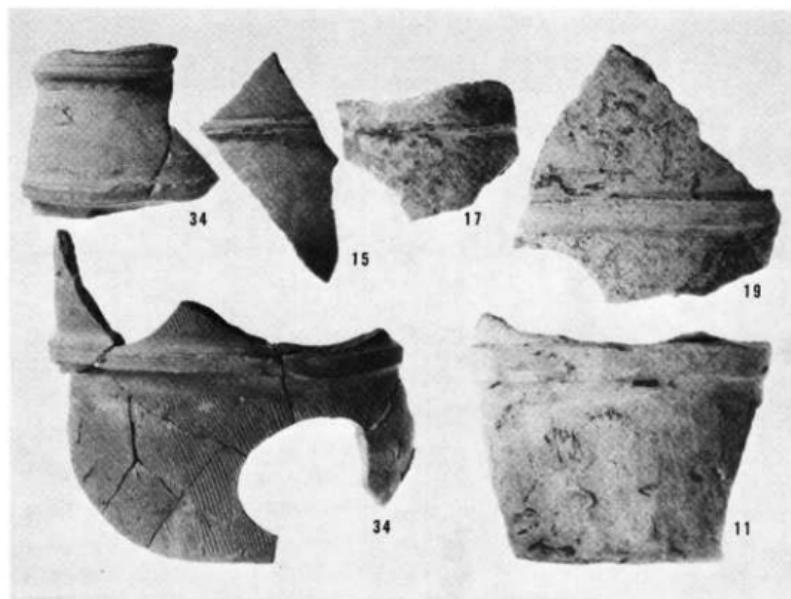
円筒埴輪 8 AII a 類 24 AII b 類



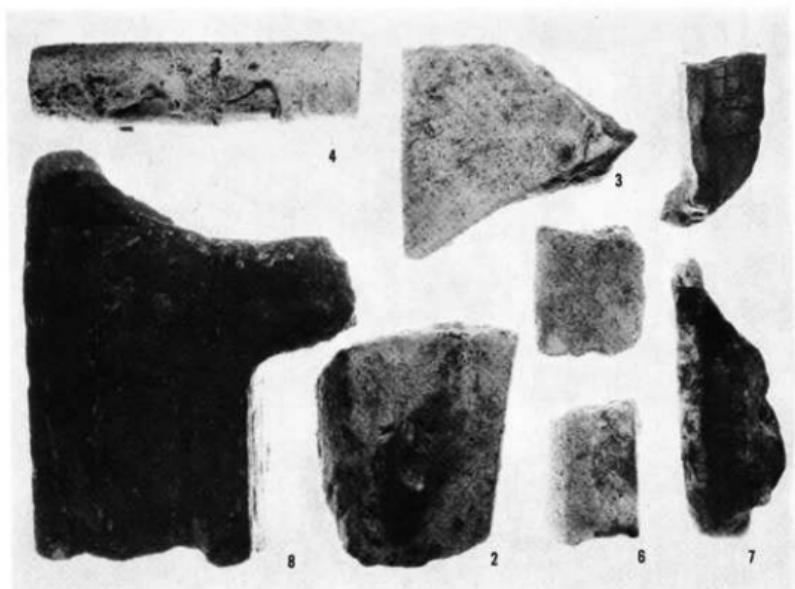
円筒埴輪 9.10 AII a 類



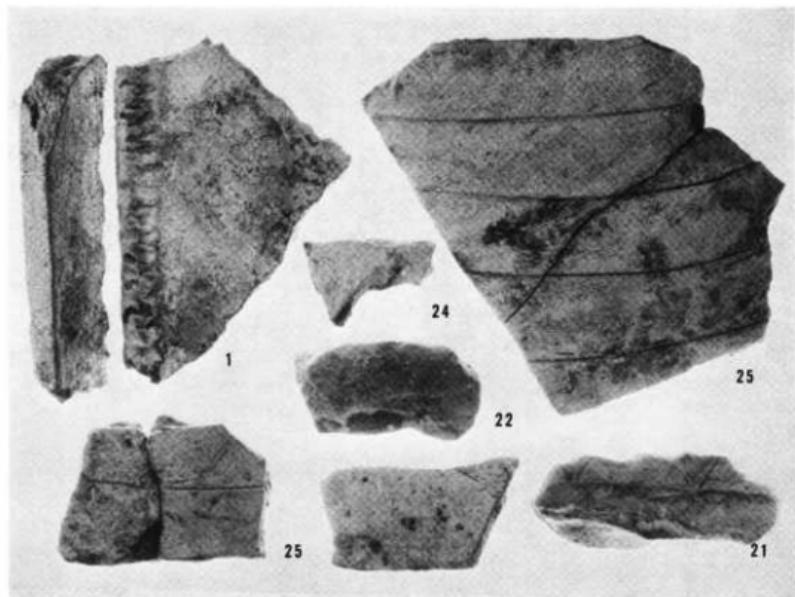
円筒埴輪 28 A II b 類



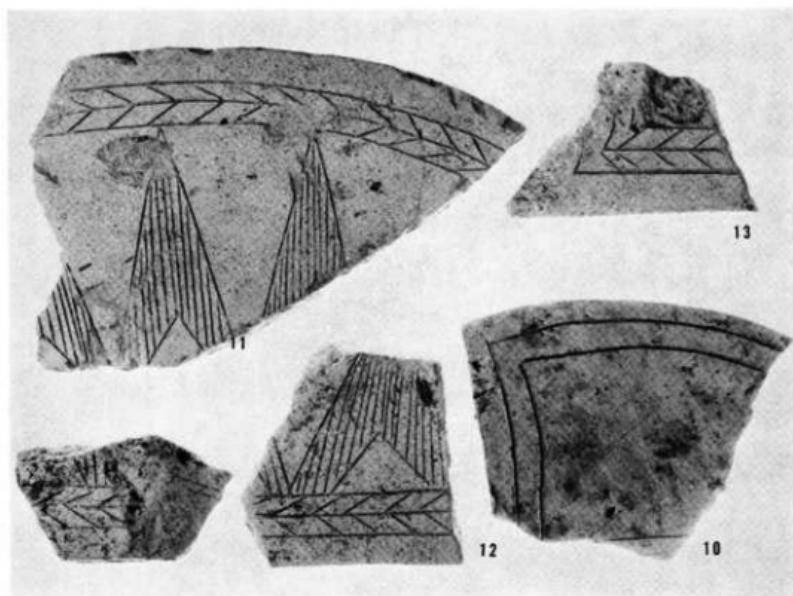
円筒埴輪 17.19.11 Bc 類 剥離形円筒埴輪 34



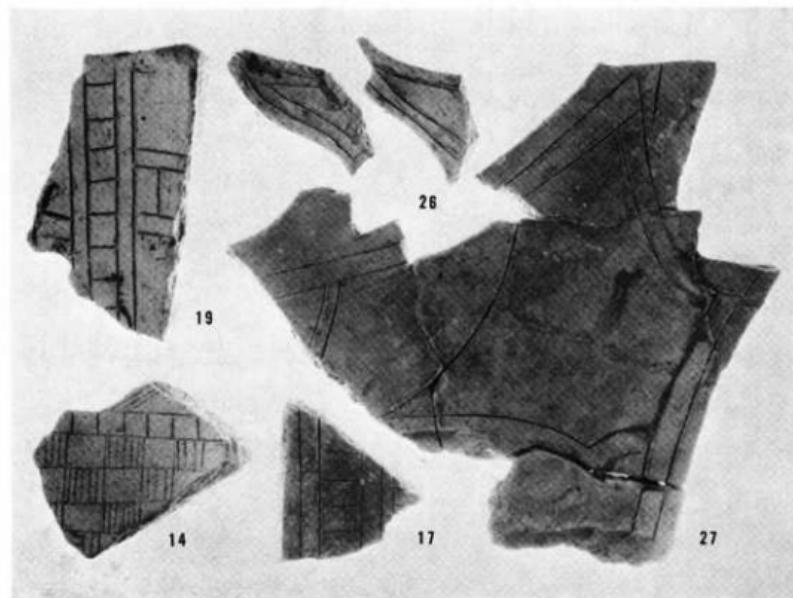
形象埴輪 家（右上は不明）



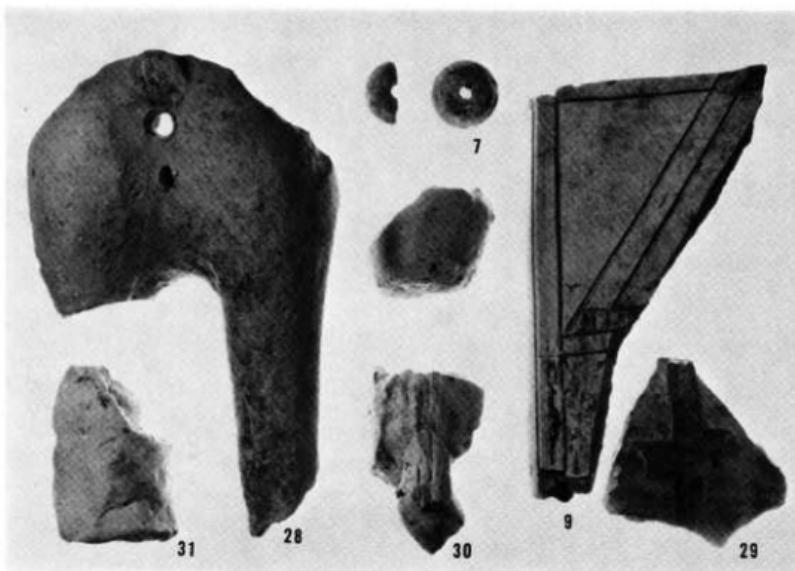
形象埴輪 1 家の接合部片 25 草摺 21 短甲 他は円筒と笠部



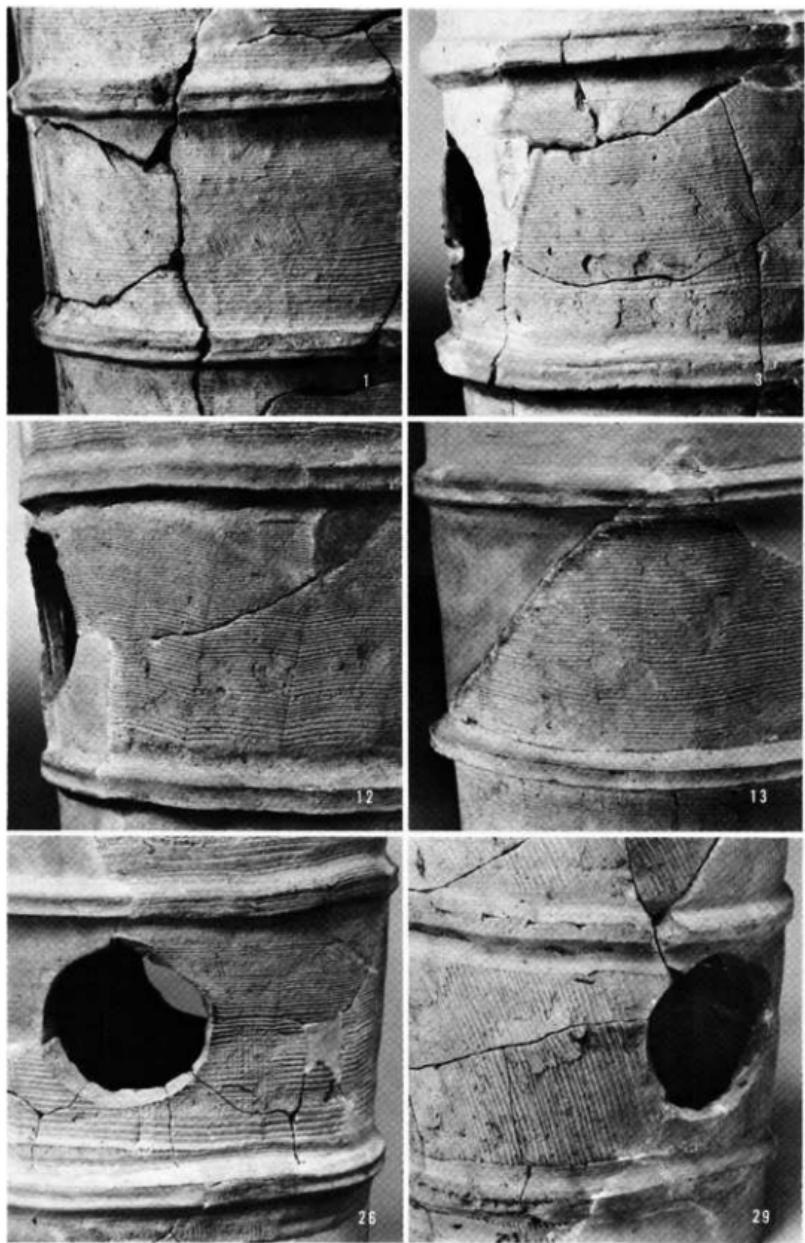
形象埴輪 厚



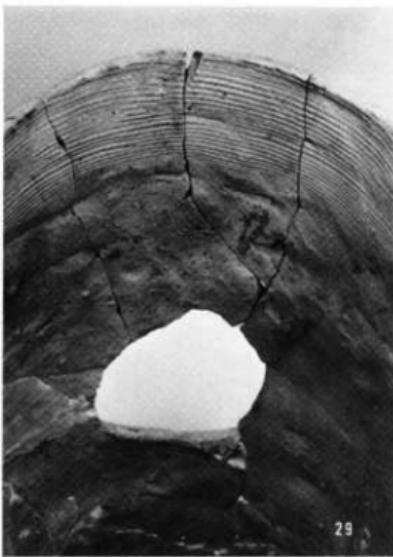
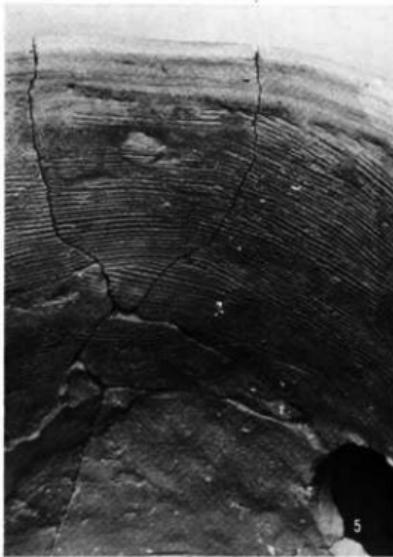
形象埴輪 14 厚 27 鞍節板 26 ひれ 17.19不明



須惠器 1.2 杯 3 無藍高杯 4.5 器台 6 壺 24 杯 25 坩



円筒埴輪外面の調査 1.3.12.13.26 A類 29 B類

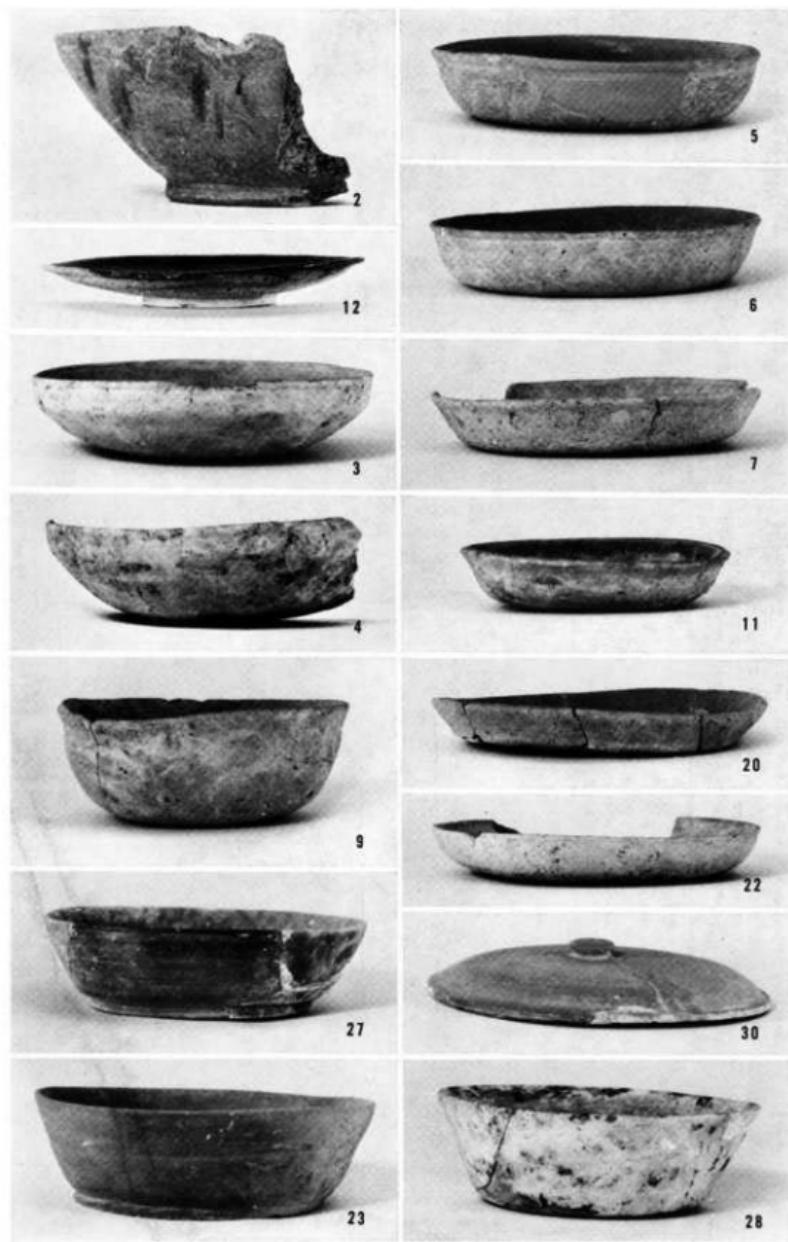


円筒埴輪内面の調査 上 ユビ+ヨコハケ 下 タテハケ

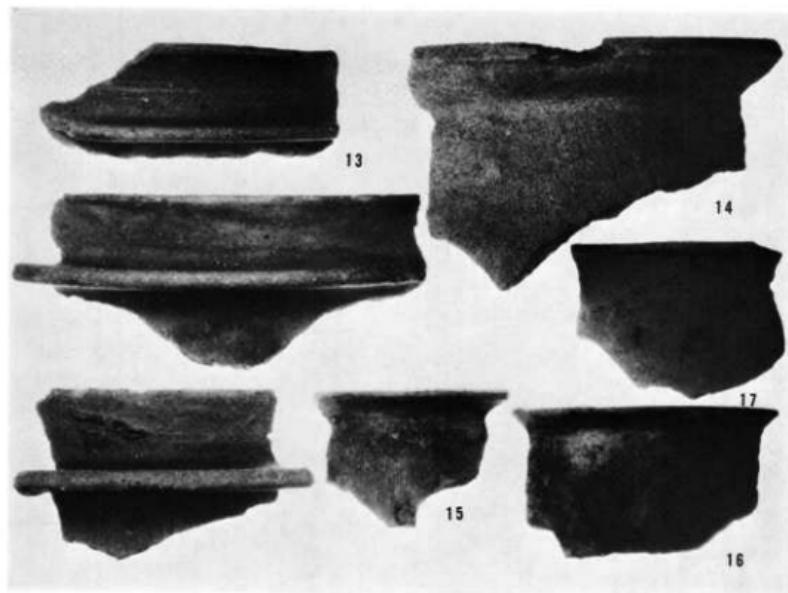


円筒埴輪底部の調整 1.5.33 未調整 12 正立時の外面ユビナデ  
13 倒立時の両面オサエ 25 倒立時の内面削り

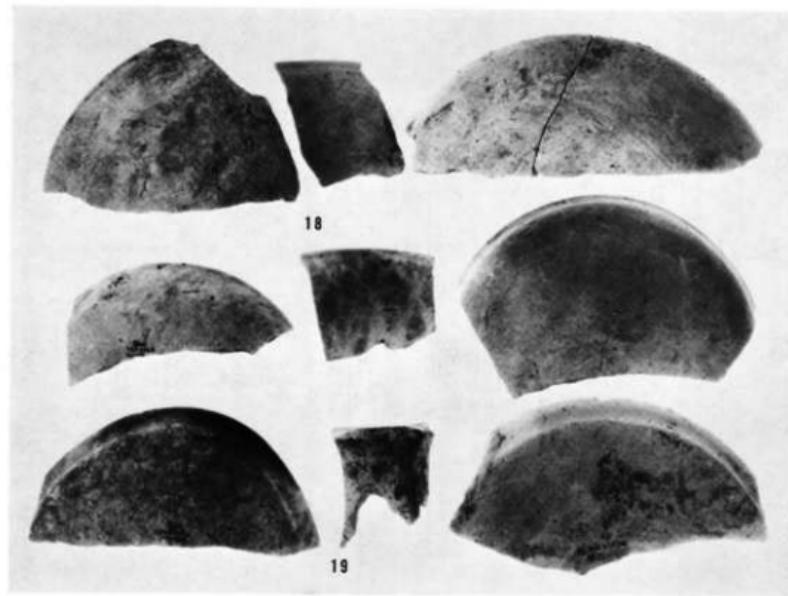
圖版 17 瓜生堂上層遺跡  
遺物



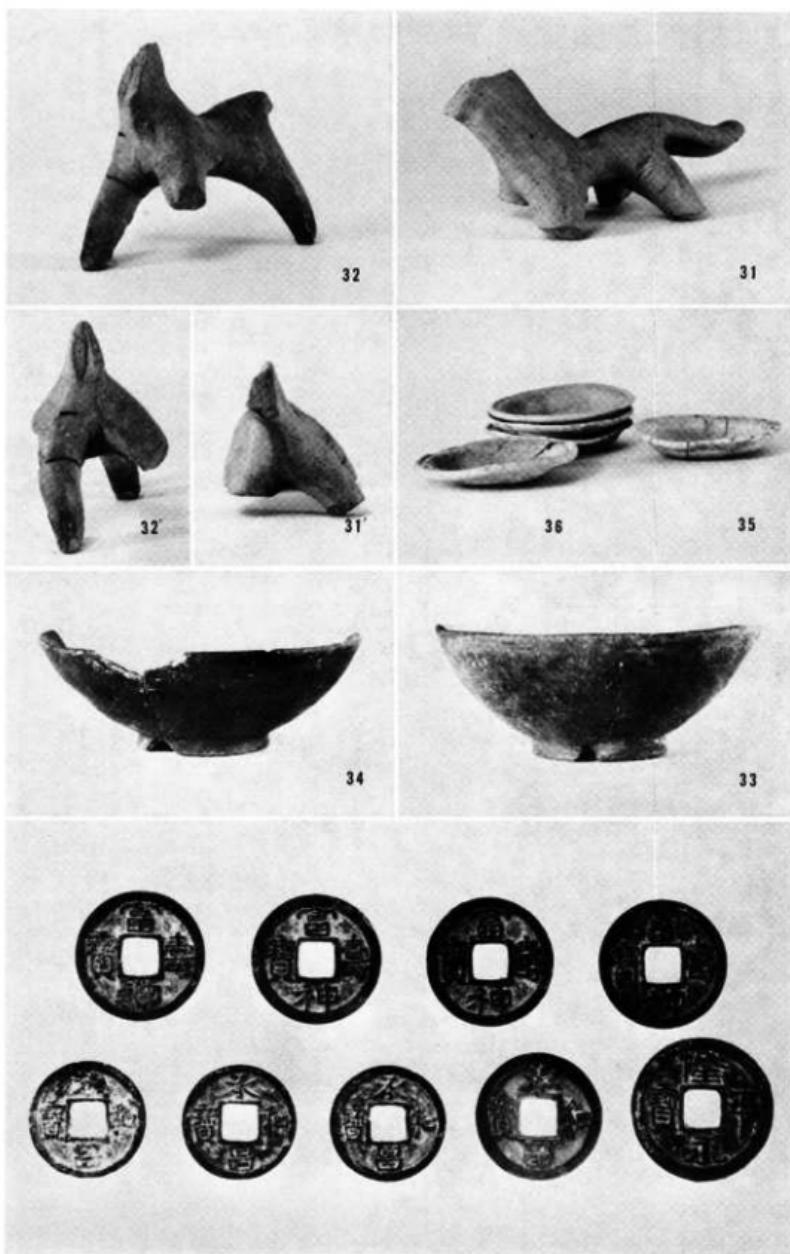
歴史時代の土器 12 黒色土器 23.28.30 須恵器 他は土器



歴史時代の土器 土師器



歴史時代の土器 土師器



歴史時代の遺物 31.32 土馬 35.36 土師器小皿 34.35 黒色土器 下銅錢



西北地区 弓生時代後期の竪穴住居址（西より）



西北地区 南壁断面



西北地区 歴史時代の遺構（西より）



西北地区 炭化物混り暗褐色土の範囲と中世以後の溝（西より）

西南地区  
土器棺墓

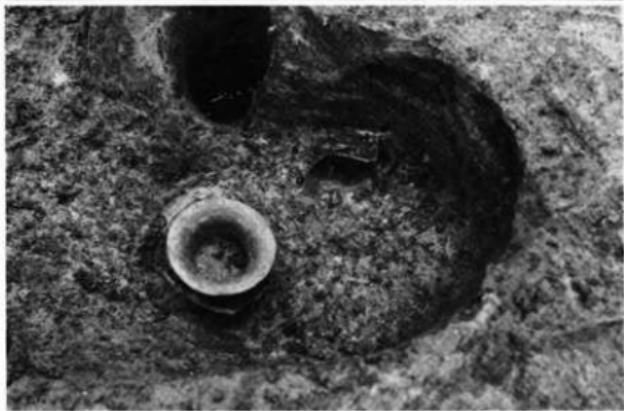


土器棺墓小石室



土器棺墓小石室  
床面検出後







5



12



1



6

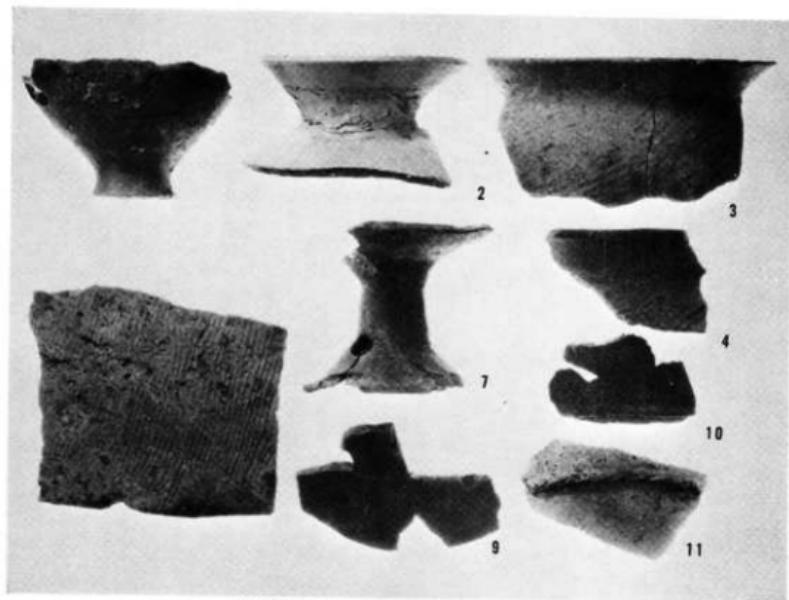


58

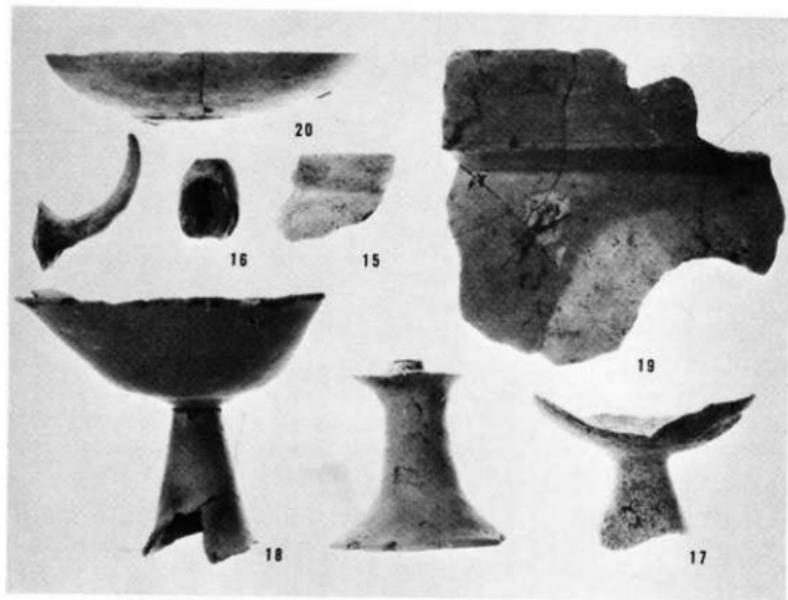


59

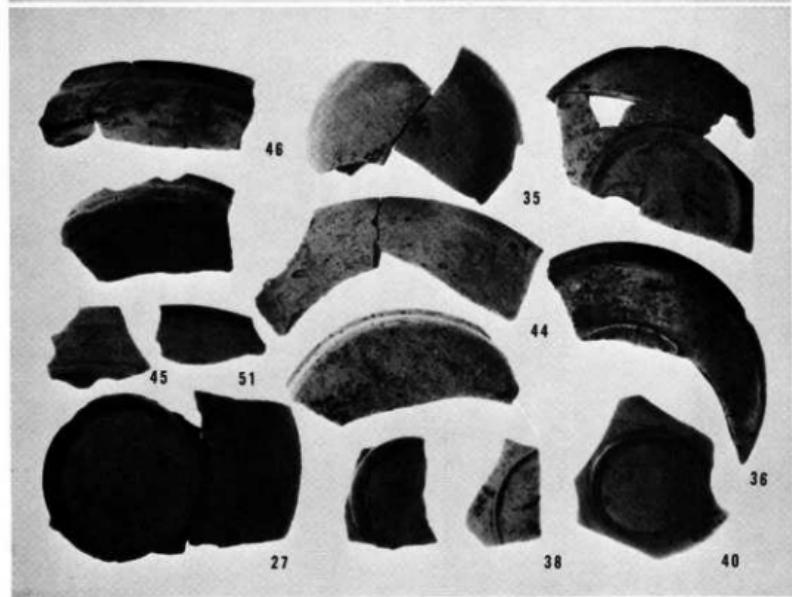
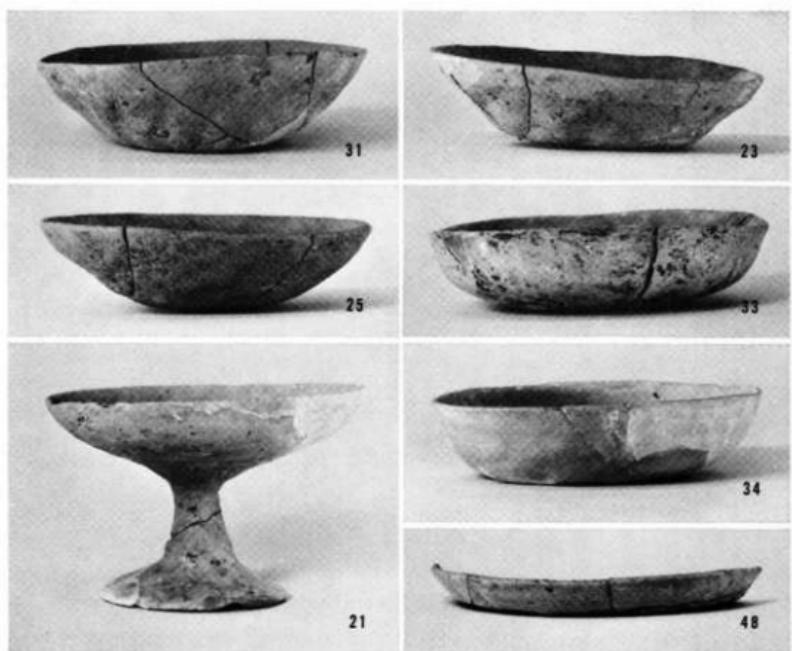
弥生時代の土器 1.5.6.12 歴史時代の土器 58.59



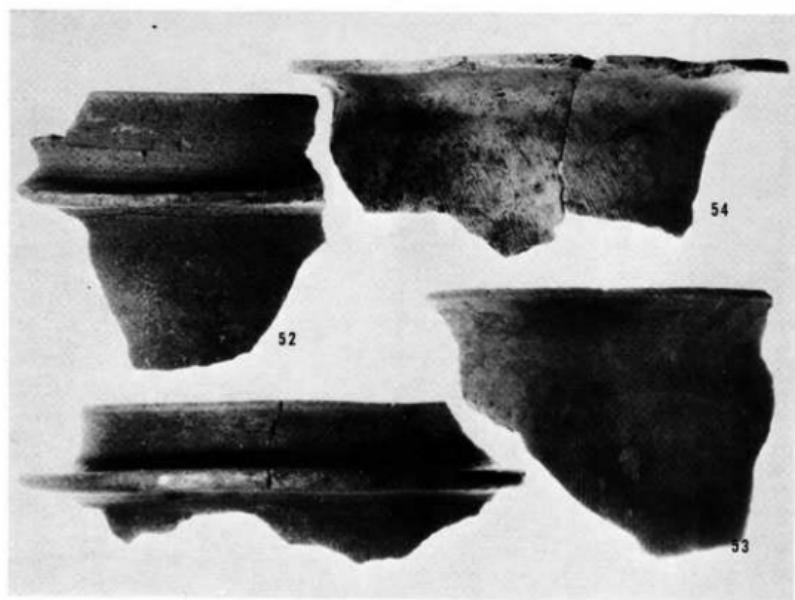
弥生時代の土器　歴史時代のカマド片（左下）



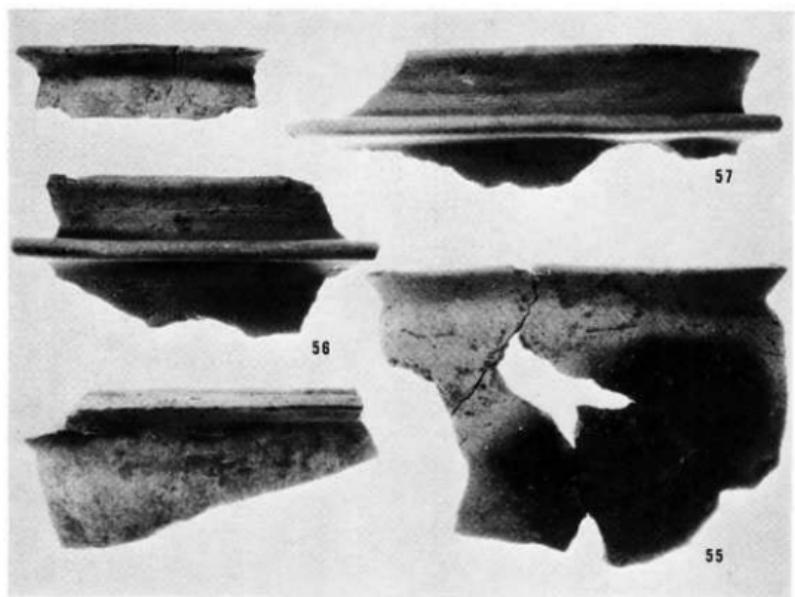
古墳時代土師器 15.17~19.左上　歴史時代の土師器 20.中下　土錘 16



歴史時代の土師器 黒色土器 36.38.40.中下.右上



歴史時代の土師器



歴史時代の土師器

### 正 誤 表

訂 正箇所	誤	正
P 5 下から10行	平家時代初め	平安時代初め
P 7 下から 5 行	調査地西部の焼土壙完形に	調査地西部で完形に
P 8 下から 4 行	同筒形をなす。	円筒形をなす。
P 10 下から 2 行	以上の同筒埴輪の	以上の円筒埴輪の
P 12 表 2 中央左	全国ナデー	全面ナデ
P 20 下から11行	外面テタないし	外面タテないし
P 20 下から 2 行	内面はユビオサ	内面はユビオサエ
P 28 下から 9 行	34より浅い塊形	33より浅い塊形
P 28 下から 6 行	黒色土器塊35	黒色土器塊34
P 41 第 8 図スケール	2.0 cm	40cm
P 44 上から 7 行	2. S~12は	2.5~12は